恩知らずのトゥッティ・フルッティ

まみゅう

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポルポに仕掛けられたバナナの”当たり”を引いてしまったパッショーネ所属の女主人公が、ジョルノを調べる＆始末するためにブチャラティチームに派遣されるお話。配属初日からアバ茶の洗礼を受けたり、涙目のルカの仇討ちに巻き込まれたりと……なんだかんだシリアス（？）な中編です。キリのいいところでひとまず完結。

※女主人公物と言いつつ、主人公はやっぱりジョルノです

※バナナ自殺阻止により、若干原作時間軸にズレが生じています。

※原作漫画、恥パ履修済みですがまだまだにわかですので、能力設定等温かい目で見守って頂けると幸いです。

※オリジナルスタンドは全て洋楽タイトルを参考にしています。もし他の二次創作者様や原作様と被っていましたら申し訳ありません。

目次

トゥッティ・フルッティの逡巡 ―― 1
ネアポリスの覚悟 ―――― 10
歓迎はティータイムにて ―――― 17
ペイント・イット・ブラックの消失 31
ナイティナイン・プロブレムスの災難① ―――― 43
ナイティナイン・プロブレムスの災難② ―――― 52
ペイント・イット・ブラックの共犯 62
涙目のメモーリエ ―――― 72
天高きオルゴーリョ ―――― 82
銃声とフェリチータ ―――― 95
恩知らずのトゥッティ・フルッティ 111
番外編：止まらぬフラテッロ ―― 130

トゥッティ・フルッティの逡巡

麻薬は人類の文明発祥と同じほど古くから存在し、その一種であるケシ――つまり、アヘンの起源はなんと紀元後三十年、メソポタミア文明の時代にまで遡る。

それほどまでに麻薬の歴史が人類と密接に結びついているのは、それが快楽や苦痛からの解放をもたらし、宗教や芸術などの分野においてはときに素晴らしい創造性さえ与える代物だからだろう。

しかし、世の中そう上手い話が転がっているわけがない。可愛いあの子が既に誰かのお手付きであるように、メリットがあればデメリットもあって当然だ。

そしてこのプラトリアーナ・ベルナルディーニというイタリア女は本人が服用していないにも関わらず、見事なまでに麻薬の害と恩恵を享受していた。

そう、かつての彼女は麻薬によって母を失い、今現在はその麻薬の産む金によって生活の一端を支えられているのだ――。

「ポルポさん、頼まれていた件は無事に終わりました。こちらがその報告書になります」

「ブフゥー、ベルか」
一見したところ無人であった牢獄――と呼ぶにはいささか贅沢すぎるが――に向かって声かけると、キングサイズを超える大きさのベッドが荒い息を吐きながら身を起こす。その正体はギャング組織〈パッショーネ〉の幹部、ポルポであり、ベルの直属の上司でもある男だ。ベルが牢獄脇にあるポストのような窓口から報告書の束を差し入れると、彼はほとんど這うようにしてそれを手に取り、フム、と唸った。
「よろしい。ネアポリス港の交易は順調みたいだね」
「はい。拳銃、偽札、偽造クレジットカード、ポルノ雑誌、どれも問題はありません」
確かに交易であることは間違いないが、今挙げたようなものは全て密輸品だ。ポルポはこのネアポリス地区の賭場と密輸を管轄しており、本人が動けないため、賭場の仕切りの方はブローノ・ブチャラティ、密輸関連はベルが代わりに請け負っている。なぜベルのような十七歳の小娘がチームも組まずにそんな大役を任せてもらっているのかというと、それは彼女のスタンド能力にも関わってくるのでおいおい説明するとしよう。
ベルはポルポが資料を置き、クッキーの箱に手を伸ばしたのを見ると、「あのォ……」と躊躇いがちに口を開いた。
「なんだね？」
「そのォ、以前よりも街で麻薬中毒者を見ることが多くなりまして……住民からも不安

の声が上がってるんですよ」
「……」
「ネアポリスの港はイタリアでも第二の貿易港なのに、密輸品の中に麻薬はない。空路もそうです。組織に麻薬チームができたのは小耳に挟んでますけど、まさか、」
「ベル、」
ぎろり、と紅い瞳にほとんど真上から見下ろされ、ベルはその先の”うちが製造までしてるんじゃあないか”という言葉を呑み込んだ。険しい顔をしたポルポはいつにも増して迫力があり、そのくせその顔色は叱責を恐れるマンモーニのように青ざめている。彼はその太い指の先をベルに向けると、言い含めるようにゆっくりと話し出した。
「いいかね、余計な事は考えるんじゃあない。ボスはわたしにネアポリス地区を任せた。そしてわたしは君に密輸関連の仕事を任せた。それはこの世で最も大切な、『信頼』で成り立っている関係だ」
「……」
「薬のことはわたしたちの管轄外なのさ。それに勝手に首を突っ込もうとするのは、ボスからの『信頼』を『侮辱する』ことではないかね、ええ？」
「……はい、申し訳ありませんでした」
分厚い強化ガラス越しに頭を下げれば、わかればよろしい、との声が返ってくる。そ

の声はどこか安堵したような響きを含んでいて、本当にこの男は麻薬事業については詳しく知らず、関わる気もないのだな、と思った。信頼だのなんだのと御託を並べてはいるものの、結局のところは保身が第一。そういう性格だからこそ、安全な刑務所暮しを選んでいるのだろう。

指先を舐るようにしながらクッキーを食べだしたポルポは、まるでこの気まずい雰囲気をなかったことにするかのように「君も食べるかね？」と柄にもないことを口にした。ここには仕事の都合上何度も通っているが、ベルがポルポに食料の差し入れをしたことはあっても、逆に何かを貰うということはほとんどない。ポルポの口利きと〈パッショーネ〉のバッチさえ見せればボディチェックなどあってないようなものだが、ベルはたとえ札束だろうが唾液のたっぷりとついた手から何かを貰いたいなどとは思えなかった。

「えっ、いや、私は甘いものは苦手なので……」

「おやおや、それは人生の八割以上を損しているというものだよ。では果物は？」

「ええと、じゃあ……はい、頂きます」

ここで「だが断る」と言えたなら、かなりスッキリしただろう。しかし後々の関係性を考えて、ベルは渋々頷いた。保守派なのはこの男に限らず、自分もだというわけらしい。ポルポが隙間から差し出してくれたのが、皮で中身が保護されているバナナだった

というのがせめてもの幸いだろうか。まさかこんなものを持って外に出る訳にもいかないので、観念したベルはヘタを折るようにして曲げ、するりと皮を向いていく。

その時、カチリ――と妙な音がした。

「……ん？なんだ、今の音は？」

バナナを渡した方も、受け取った方も、揃って首を傾げる。どこかで聞き覚えのある音だと思ったが、それがなんなのかすぐにはピンとこない。一体なんでしょうね、と目だけで語って、ほとんど上の空になりながら儀礼的にバナナに口をつける。唇に触れたそれが金属特有の冷たさを帯びていると悟った時、ベルの指はバナナだったはずの――そこに存在するわけのない、銃の引き金にかかっていたのだった。

（トゥッティ・フルッティッッ!!）

間一髪で出したスタンド能力の攻撃対象は、拳銃ではなくそれを握る自分自身の手。彼女は触れた物質の組成を『砂糖』――スクロースに変える能力者であり、変化させるのにかかる時間は対象物の組成に依存する。つまり元の組成が砂糖に近い、炭素や水素で構成されているものは一瞬で、窒素なんかも周期表で言えば炭素のお隣なわけだからそう時間はかからない。しかし拳銃なんて金属は、この土壇場で〝変換〟している余裕はなかった。自身の右手の肉がサラサラと白い粉になって床に散り、支えるものがなくなった拳銃もそれにコンマ数秒遅れる形で落ちて、カツンと大きな音を立てる。

ベルは信じられない、と言わんばかりの表情で、ガラスの向こうのポルポをまじまじと見つめた。
「これは……一体……?」
「わ、わたしではないッ! 知っているだろう、ブラック・サバスにはそんなことはできないッ!」
「ええ、でも、だとしたら――」
これはポルポを狙った暗殺だと考えるのが妥当だ。しかも明らかにスタンド遣いによる攻撃で、自殺に見せかけた巧妙な手口である。ベルは床に散った砂糖から失った右手を復元すると――風のない室内であったのが幸いだった――「心当たりはありますか?」と冷静に尋ねた。そこには先程までの、保身的でオドオドとした雰囲気の女はもういなかった。
「直近で尋ねてきた人間は?」
「今日は朝から注文したピザをコリオラノの奴が届けに来たくらいだ。昨日はそう、新入り……ジョルノとか言ったガキが、ライターを返しに来た」
コリオラノという男は、ベルもよく知っているし仕事で関わりもある。非常に気のいい男で、情報分析チームに属しているくせに、ポルポの使いっ走りをさせられても嫌な顔一つしない。〈パッショーネ〉に属してもう二桁の年月になろうかという彼が今更ポ

ルポの暗殺を企てるとは思えないし、何より彼はその所属に相応しい、あまり攻撃性能のないスタンド能力だ。少なくとも、拳銃に変えたバナナをこっそり仕込んでおくような、そんな芸当はできない。
「では、その新入りはスタンド遣いである可能性が高いと」
「だが、そんな馬鹿な……能力に目覚めたばかりで、わたしと会うのも二回目だというのに」
「ポルポさん個人にではなく、組織そのものへの恨みかもしれません。殺しますか？」
街では義賊めいた扱いだが、これでもギャングの端くれだ。荒事には慣れているし、ベルのスタンド『トゥッティ・フルッティ』は炭素、酸素、水素の三原子でその９５％を構成している人間とはすこぶる相性がいい。密輸事業を請け負っているのは能力による物資の隠匿が容易であり、ベル自身の希望もあってのことだが、仮に暗殺チームに配属されていたとしてもそこそこ仕事はできる自信があった。
「当然だ、これはれっきとした『侮辱』だよ、ベル。お前の能力で楽に死なせてやるのが、口惜しいくらいだ。砂糖になった後に獣に食わせても、単なるドルチェにしかならないだろう」
「では、他の人間にやらせますか？」
「ブフゥー、いや、君に任せよう。だがまずは動機を聞き出さなくっちゃあならない。こ

の殺意がわたしに対するものなのか、それとも組織に対するものなのか。他にも、志を同じくしている裏切り者がいるのか」

ポルポは話しているうちに落ち着きを取り戻したらしく、そうするとまた腹が減ったのか、性懲りも無くクッキーを数枚つまんで口に放り込む。しかし、甘いはずのそれを味わったポルポの表情はこの上なく苦り切っていた。

「その新入りはだね、あのブチャラティの紹介だったのだよ」

「では――」

「あぁ、調べる必要があるね。わたしはあの男を『信頼』していたのだが……」

『信頼』を『侮辱』されたのなら、殺人すらも神は許すだろう。それがポルポの口癖であり、理念であり、信条である。ヴァティカーノのカトリック教徒が聞いたら卒倒しそうな話だが、ギャングに救いの手を差し伸べるような奇特な神はそもそもいないので問題あるまい。ポルポは神の名を引き合いに出して、自分の美学を述べているだけだ。

だが、それでいい。美学を語る男はわかりやすくていい。ベルは人間離れした巨躯を持つ上司を見上げ、その命令を待った。

「今までは管轄をきっちり分けていたが、ネアポリス内での連携をとるという名目で君をブチャラティチームに派遣する。期限は一週間。その間に奴らを調べあげて、白でなければ殺せ」

「ヴァ　ベーネ（分かりました）」

白でなければ、ということはグレーでも殺せということだろう。しかし、こんな組織に身を置いていて、果たして純白の人間なんて存在するのだろうか。

「まあ、全部砂糖に変えれば、純白か……」

刑務所を後にしたベルは、ぽつりとそう呟いて港の方へと向かった。一週間の任務。簡単に言ってくれるが、その間こっちの事情を汲んで船の出入りが止まってくれる訳では無い。こういうとき、チームを組んでいないのは不便だなと思ったが、とにかく誰か仕事を任せられる奴を見つけなくてはいけない。たぶん、いやきっと、コリオラノくらいしか頼める相手はいないのだが……。

はぁ、とこぼされたベルの特大のため息は、ネアポリスの澄み渡る青空に溶けるように消えていったのだった。

ネアポリスの覚悟

このネアポリスの街で、ブローノ・ブチャラティのことを悪く言う奴はいない。老いも若きも困ったことがあれば友人のように気軽に彼の元を訪ね、男も女も彼が通りを歩けば明るく声をかける。

――元気かい？調子はどうだい？

それは回護料をもらっている彼の方が聞くならともかく、住人側から行われる親しみのこもった挨拶なのだから驚きだ。

しかし、だからだろうか。ベルはいざと言う時には殺さねばならないと理解はしていながらも、初めからこの男に対して良い印象を抱いていた。同じネアポリスを仕切る立場として何度も顔を合わせたこともあるが、その度に毎回、良い意味でギャングらしからぬ男だなと思わされる。

真面目で、責任感が強く、温厚――。

けれどもそれはブチャラティの数ある側面のうちの一つなのかもしれない。そうでなければギャングの、下っ端とはいえチームリーダーなんてものは到底務まるはずがな

いからだ。

　ベルが気を引き締めて待ち合わせ場所のプレビシート広場に向かうと、案の定まだ十分も前だと言うのにブチャラティはそこにいた。こちらに気づくなり小さく片手を上げた彼は、やあ、と小さく挨拶をする。それにつられるようにしてベルもまた片手を上げれば、彼は薄く微笑んだ。

「久しぶりだな、ベル」

「ええ、久しぶり。ブチャラティ。悪かったわね、急な事になって」

「仕方ないさ。オレも君も上の命令には逆らえない。それに、ネアポリスの治安の為なら労は惜しまないつもりだ」

　治安という言葉が警官からではなく、ギャングから出るというのがなんとも皮肉な話だ。だが、過去にこの国の警察に絶望したことのあるベルは、警察よりもギャングの方が問題解決能力においては勝っていると感じている。ブチャラティの言葉に同意するように頷き、

「近頃は特に子供が目立つわね」

　と声を潜めた。何のことを指しているかは、わざわざ口にしなくてもお互いにわかっているはずだった。ブチャラティの表情がさっと陰りを帯び、先程までの明るい声音は

どこへやら、やや詰問するような口調に変わる。
「……本当に、このネアポリスの港に密輸されているわけではないんだな？」
「ええ。ルートは海路でも空路でもない。でも、確実に蔓延している。だから私は製造を疑ってるの。このイタリア国内での製造を」
「……それで、ポルポは一体どうするつもりなんだ？あの男は管轄外のことには基本的に手を出さないはずだが」
「そう。管轄〝外〟のことにはね」
　確かに常習性のある麻薬は莫大な富を産むが、広まりすぎれば犯罪や労働力、生産力の低下に繋がり、経済自体も行き詰まる。そして街や国の経済力が低下すれば、そこからみかじめ料を得ている組織にも、少なからず実害があるはずなのだ。決して表立って口には出せないが、一体ボスは何を考えているのか、というのがベルの正直な思いである。麻薬を売るなら、よその国にだけ流せばいいものを。
　ベルは自分の目の届く範囲の人間が不幸せになるのが嫌だと思うくらいの正義はもち合わせていたが、知りもしない人間のことはどうでもいいと思っていた。酷く利己的なことは自覚しているが、この世界から麻薬が撲滅される日が決して来ることがないと、その短い十七年の人生の中で既に学んでいる。誰かの幸福は必ず誰かの不幸の上に成り立っているのだ。それに耐えられないようなら、ギャングどころか人間すらも向い

ていないだろう。
　ベルは少しげんなりとした気持ちになると、ポルポはね、とブチャラティに倣って上司を呼び捨てにした。
「ネアポリスがこれ以上悪くならなければそれでいいと思っているのよ。ネアポリスの収益の半分はあの男のものだから。だけど麻薬チームに、ましてやボスに売らないでくれとは言えない。今や麻薬は大事な組織の資金源だからね」
「……ッ、だがッ！」
「だがもしかしもないのよ。私達にできるのはネアポリス内の流通量をなんとかセーブして、最低限子供の手に渡らないようにして、麻薬をせいぜい”副作用の強い高級なお薬”としてぼったくるくらいってわけ。要は混ぜ物をして強制的に用法用量を守ってもらうってことよ」
　奇妙なことにベルをブチャラティチームと関わらせるため、ポルポが作った嘘の口実は彼女自身が密かに思い描いていた計画そのものであった。それは薬量を減らすことによる、中毒、依存症状の軽減。ネアポリスで蔓延している麻薬は主に粉末で、重度の中毒患者こそ静脈注射によって摂取するが、最初は誰しもまず経口摂取から道を踏み外すのだ。経口の段階なら一部を砂糖に変えることで徐々に依存度を減らせるし、組織の都合上、新たな犠牲者はゼロには出来ないものの廃人化することだけは食い止められ

る。もちろん、効果が薄ければ大金を出して求める人間が減るので収益減少という意味では疑われるかもしれないが、それでも下克上をするよりは余程安全策である。

そもそも、狭い街における麻薬の収益なんてものは一時的なものなのだ。ある程度行き渡ればそこから大きく伸びることは無いし、同時に人々の生活は荒れ、麻薬以外の収益が下がる。他の街との”アガリ”の差は、時間が解決してくれるのだ。

ベルはギャングに身を置きながらも、麻薬の蔓延を良しとはしていなかった。この件に関してはブチャラティとシンパシーさえ感じる。しかし女性というのはいくら夢見がちな妄想を口にしようと、一皮むけば恐ろしいまでにリアリストであることが多い。一方で普段は冷静ぶっている男の方が、心のどこかでいつか世界が自分の思い通りになるのだと思っていたりする。結局のところ、女は夢を”見る”だけだが、男は夢を”持つ”のである。そしてその感覚の差がブチャラティの表情をより苦々しいものにしたのだった。

「それでは……麻薬は無くならないだろう。子供に渡らないようにするのも限度がある」

「そもそもこの街から完全に無くすなんてのは、自分がボスにでもならない限り不可能だわ。私は前からずっと流通を抑えることしか考えてなかった。そのために密輸事業に目をつけて志願したのよ。ま、結局未だにルートは不明なままだけれどね」

「……不可能だという君の意見が正しいと認める訳では無いが……そうだな。ポルポが我々に何をさせたいかはおおよそ理解したぜ」

ブチャラティはそう言うと、不意にどこか遠くの方を見つめるような眼差しになった。

その視線の先には一体何があるのか。

ベルはそれが分不相応な夢でなければいいと思う。そうでなければベルは、この男を組織に対する翻意ありとして殺さなければならないからだ。たとえ根っこは同じような志を持っていたとしても、ブチャラティがポルポの暗殺を目論見、ボスの座にまで欲を出せば、彼は間違いなく消される。そして一度ボスに睨まれたネアポリスの街は、今よりももっとずっと酷いことになるだろう。

絶対にそんなことをさせるわけにはいかないのだ。そのためにこのブチャラティと、新たに入った新入りのジョルノとかいう男を調べなければならない。

「長々と立ち話をして悪かった、オレの仲間の所に案内しよう。フーゴは知っているな？　今じゃあうちのチームは六人にまで増えたんだが」

「多いわね、覚えられるかしら……仲良く、しなきゃいけないのよね」

ベルがいかにも渋々と言った表情で肩を竦めると、ブチャラティはようやく元のように笑顔を浮かべた。

「君はもう少し人付き合いというものを覚えた方がいいな」
「あなたはともかく、野蛮な男は嫌いなのよ」
「でもきっと、君も気に入るさ」
「気に入る？」
「あぁ、最近、うちのチームに入った男が面白い奴なんだ」
そう言ったブチャラティの目は、熱に浮かされでもしたかのように生き生きと輝いていた。そのくせ、ネアポリスの空や海のようにどこまでも深く澄んだ青色をしている。
あぁ、この目は――。
「……そう、楽しみだわ」
ベルは密かに覚悟を決めた。まだ会ったことも無いジョルノという男を殺すことに躊躇いは感じなかったが、ブチャラティに関してはベルもそれなりに思うところがある。しかしそれでもやはり、ベルにベルの都合というものがあって、覚悟は出来ていると言うしかないのであった。

歓迎はティータイムにて

やけに遅いな、とジョルノは三杯目にもなるティーカップを傾けつつ、リストランテの窓から表通りの方を眺めていた。既にお決まりらしい、メンバーのテーブルから少し離れた位置に一人で腰掛ける彼の姿は”馴染めなさ”そのものであったが、当のジョルノ自身はまるでちっとも気にしていない。むしろあちらは騒がしすぎて、午後のひとときを過ごすには相応しくないとすら思っている。

思い返せば一昨日、ジョルノがブチャラティに連れられて、初めてこの店にやってきた時も同様の有様だったように思う。

ちらり、と窓から店内へと視線を移したジョルノは、チームにおけるブチャラティの存在の偉大さを改めて思い知っていた。

「うーん、やっぱわかんねェーーーッ！」

「どこがわからないんですか？二桁の掛け算になったとしても、『九九』さえ覚えていりゃあ解けないってことはないでしょう」

テーブルの上に小学生相当の問題集を広げたナランチャは、フーゴに勉強を教えて

貫っているようなのだが、先程からああして大声を上げるだけでちっとも進んだ様子がない。集中力のない彼はおそらく目の前に座るアバッキオのヘッドホンから漏れてくるかすかな音楽に気を取られているし、フーゴの根気強さには一種の尊敬を覚える程である。フーゴはテーブルを指でトントン叩き、ナランチャの注意を集めると「いいですか、」とノートの方へと身を乗り出した。

「先に一桁目同士を掛け合わせるんです。四の段はまだ言えますよね？」

「ああ！言えるぜッ！えーっとォ、しいちがし、しにんがし……」

「オイオイッ!!テメーら何度言やァわかるンだよッ!!オレの前で『四』にまつわる話をすんなって言ってんだろーがッ!!!」

しかし、せっかくナランチャが『九九』を暗唱し始めたというのに、それを遮る勢いでフーゴの隣の男――ミスタががたん、と椅子を鳴らして立ち上がる。その発言の内容は意味不明ながらも、表情だけは恐ろしく真剣であり、ミスタが本気で怒っているというのだけはかろうじて理解ができた。

「ただの『九九』じゃあないですか……あなた、そんな調子でどうやって生活してるんです？」

「うるせェ！順番に『四』ずつ増やしやがってよォーーッ!!縁起悪イったらねーーゼッ！」

「もォ～～邪魔すんなよミスタァ！せっかく解けそうなのにさァ～～！」
「他の問題をやれよッ！四の出てこねーやつをよォッ！」
「はぁ、仕方ありませんね……ナランチャ、こっちの問題にしましょう」
　向こうのテーブルで静かなのは年長であるアバッキオくらいだが、彼こそが最もジョルノと馬の合わない――実際には、一方的に目の敵にされているだけなのだが――男なのだから、ジョルノが離れて座るのも無理もないだろう。そもそも今日だってブチャラティに呼び出されたりしなければ、放課後こうしてこのリストランテで時間を潰していたかどうかも怪しい。
　ジョルノは再び窓の外に顔を向けると、ブチャラティと”もう一人”の人物が現れるのを今か今かと待ちわびていた。他のメンバーはまだ詳細を知らされていないようなのだが、昨日の初顔合わせの後、簡単にギャングの仕事について教えてくれていたブチャラティのコンピューターに、一通のメールが届いていたのをジョルノは知っている。
　その差出人は、こともあろうかポルポだった。
「早速仕事ですか？」
　その時何気ない風を装って尋ねてみたが、ジョルノがゴールド・エクスペリエンスを

使って拳銃を仕込んできたのはまさに昨日のことである。あの大食らいの男ならば既に籠のフルーツくらい食べていると思うのだが、まさか発動しなかったのだろうか。最近身についたばかりのこの能力の持続時間を、ジョルノはまだ完璧に把握している訳では無い。それゆえ単純に能力の問題で上手くいかなかったのか、暗殺をかわされたのか、判断することが難しかった。

「あぁ、そのようだが……こいつはオレにとっても驚きだぜ」

「伺っても?」

「まあいいだろう、どうせ明日になれば紹介するんだからな」

そう言ってブチャラティは、このネアポリスを仕切るもう一人の女の存在を告げた。ベルという名前の女は主にこの街の密輸事業に関わっているらしく、ポルポの命令で明日からこちらのチームと行動を共にするらしい。

「密輸、ですか……」

「そうだが、少なくとも彼女の取り扱い品の中には麻薬は入っていないらしい。それに噂によれば彼女も麻薬によって母親を亡くしていると聞く。だからって全く警戒しないわけじゃあないがな」

「ポルポからの命令ですからね、しかもこのタイミングで……」

「このタイミング?」

ブチャラティは当然、ジョルノがポルポを殺そうとしたことを知らない。ジョルノは曖昧に笑うと

「入ってすぐいきなり大きい仕事になりそうなので、少し驚いただけですよ」

と誤魔化した。そして内心で”こいつは本当に大仕事になるんじゃあないか。おそらくこの女もスタンド使いに違いない”と考えていた。ポルポ暗殺から日を置かずに差し向けられた女をただの偶然だと思えるほど、ジョルノは能天気な男ではなかったのだ。

▼△

ほぼ三年振りにブチャラティに連れてこられたリストランテは、相変わらず客足がまばらだった。時間帯がちょうど昼食時を過ぎてしまっているせいもあるけれど、原因はやはり店を溜まり場のようにしている、このいかつい男達のせいではないだろうかと密かに思う。

ブチャラティは奥の方の席に仲間の姿を見つけると、すたすたと長い足で歩み寄り声をかけた。

「遅くなってすまないッ！昨日話した”彼女”を連れてきた！これからしばらく一緒に

仕事をすることになるから、おまえら愛想良くしろよッ！」
「ベルと呼んでください。初めましてな人も、そうでない人もよろしくお願いします」
ざっと見た感じ、やはりこの面子の中でベルと面識があるのは、いつの間にか穴あきスーツが特徴的になってしまっているフーゴくらいのものだ。彼はブチャラティが最初にチームに加えたメンバーであり、その時に引き合わされたことがある。三年前と言えばベルも前任者からようやく仕事を引き継いだばかりであり、ネアポリスを先に仕切っていたブチャラティのところへ顔を出すことも多かった。
「ベル、久しぶりですね」
「ええ、本当に。同じ街にいるのに、不思議なくらい会わないものねぇ」
「あなたがいつも港の倉庫や事務所にこもっているからですよ。ひょっとしてぼく達を避けているんじゃあないかと、ブチャラティと噂していたこともあるくらいです」
ねぇ、と同意を求められて、隣のブチャラティは苦笑していた。なるほど、そんな風に思われていたのか。しかしフーゴの予想はまさしく図星だったわけで、実際ベルは極力彼らにはあまり関わらないようにしていたのだった。いや、もっと言うと仕事以外では、組織の人間と親しくしようと思っていなかった。警官よりギャングの方がマシだという気持ちは確かにあれど、ベルはギャングも同じくらいに嫌いだったのである。善人と悪人なら悪人の方が強く、同じ悪人なら警察よりもギャングの方が強いから、という

消去法で”パッショーネ”に入ったに過ぎない。強さというのはベルの手が届く範囲の、無けなしの平和を守るのにどうしても必要な代物だった。
「へぇ～～フーゴは知ってんだな。オレ知らなかったよォ、あのデッケェ港や空港の方はアンタが仕切ってたんだなァ」
「それはいいとしてもよォ～～、しばらく一緒に仕事するってのはどういうことだ、ブチャラティ」
「そうだぜ、ただでさえ生意気なガキが一人増えて迷惑してんのに、この上知らねー女まで増えちゃあな。いくらアンタが連れてきたと言っても、説明ぐらいしてもらわねーと納得いかねーぜ」
　まだどこかあどけなさの残る少年と、頭巾ですっぽりと頭髪を覆った男、それから一番人相の悪い長髪の男が口々に喋り、そのくせ誰一人として名前を名乗らない。こいつらには常識ってもんがないんじゃあないかと、ベルは早速ふつふつ湧き上がってくる苛立ちを抑え込まねばならなかった。
「ポルポからの命令だ。お前らも、最近特にこの辺りで麻薬中毒者が増えてるのは気づいているだろう。俺達はベルと協力してその麻薬の出処を突き止め、この街の薬の流通量を調節するッ」
「は、はぁ～～!?なに言ってンだよ、ブチャラティ～～ッ!そんな勝手なことして、ボ、

ボスに怒られねーのッ!?」
「そもそもよォ、出処も何も、その女が港の担当なんだろォ？訳がわからねーぜッ」
「麻薬のルートは外からじゃない。うちでは扱ってないわ」
　信じてくれ、というのは確かに難しいだろうが、実際にそうなのだから仕方がない。ベルが答えると皆一斉にブチャラティの方を見たが、彼が頷くと一応は納得したようだった。
「しかしこの作戦が危ない橋だということには変わりありませんね」
「あなたは……」
「すみません、少し席を外していました。ジョルノ・ジョバァーナ、ぼくもチームのメンバーです」
　一人だけ少し離れた所に座っていたので気がつかなかったが、それではこの男がそうなのか。他の男たちと違い、きちんと名乗ってお辞儀をした彼はベルの予想よりもずっと若い。そのくせ妙に物腰が落ち着いているというか、ギャングのくせに”爽やかな”雰囲気さえある男だった。
「よろしく。ええと、あなたが噂の新入りさんね」
「噂？」
　ブチャラティからの紹介で、ベルがポルポのところから来たというのはこの男も理解

しているだろう。後暗いことがあれば『噂』の一言に顔色を変えるかと思ったが、彼は眉一つ動かさず首を傾げてみせた。そうやって疑問を持った態度をとるなら、逆に少しは眉を動かした方が普通なんじゃあないかと思えるくらい、彼は感情を顔に出さなかった。

「ブチャラティが褒めていたのよ、面白い新人がいるって」

「あぁ、それは買い被りですよ」

ジョルノの口ぶりはまるで謙遜しているようだが、その態度は他人からの評価を〝どうでもいい〟と思っているのが丸わかりだ。瞬間、剣呑な空気がテーブルを包み、この男が一人で離れて座っていた理由をベルは察する。

「どうぞおかけになって、シニョリータ。お客さんを立ちっぱなしにさせるのはいくらなんでも失礼ですから」

「グラッツェ。でもその呼び方は勘弁してほしいわ。それにお客さんではないつもりよ」

「そうでしたね」

「オイ、ジョルノ、何テメーごときが仕切ってやがるッ！」

「すみません、アバッキオ。では歓迎の〝お茶〟は先輩であるあなたに任せましょう」

「……は？」

また空気が変わった。今度は一瞬にして、驚愕に――。ベルは肌でそれを感じ取ったが、なにぶんここへ来たばかりだし、メンバー個人のこともチームの人間関係も詳しくない。なぜお茶を入れる役目をアバッキオ――強面で長髪の男の名はそうらしい――に指名しただけで皆が目を見開き、口をぽかんと開けたのかはわからなかった。手がかりを求めて隣に腰を下ろしたブチャラティの顔を仰ぐが、彼も同様にきょとんとしている。

「マ、マジで言ってんのかよォ～～ッ！」

「ちょっといくらなんでもッ！　アンタ自分が何を言ってるのかわかってますかッ!?」

「おもしれーもん見れるならオレは大歓迎だぜ～～、別に無理に飲むこたァねェんだからよォ」

ただ各々の反応から、アバッキオが入れるお茶というのがとんでもなくマズイらしいことはよくわかった。男のプラチナブロンドの髪からしてドイツか北欧の血が混ざっているのかもしれないが、もしかするとそちらに伝わる秘伝の健康茶とかだったりするのかもしれない。アジアの、タイワンの方には現地人すら苦くて吐きそうになるお茶があると聞くし、十中八九その手の地味な嫌がらせだろう。やはりいくらスカした態度をとっていても、ジョルノはまだこんな可愛い嫌がらせをするような子供なのだ。残念ながら〝トウッティ・フルッティ〟があれば、苦みなど敵ではないというのに。ベルは何

もわかっていないふりをして「そんなにすごい反応されちゃ、興味が沸くわね」と先ほどからどんどんとしかめ面が酷くなっているアバッキオに向かって微笑んだ。
「淹れて頂ける？」
「……ッ、悪いことは言わねぇからよ、やめとけ」
「おや、てっきりあのお茶は新入りの歓迎用だと思っていたんですがね。どうもアバッキオは彼女をメンバーとして認めたくないらしい」
「そういうんじゃねェ、ジョルノ、いい加減にッ」
「彼女がどう乗り切るか、それで判断できることもあるじゃあないですか。ミスタの言うように飲まなくたっていいんだし、ひょっとすると面白いものが見れるかもしれない。それともなんです？　あなたは男に飲ますのが趣味なんですか？」
　ダンッ、と大きな音を立ててテーブルを拳で叩いたアバッキオは、肩を怒らせてジョルノを睨みつけた。「オレはな、ジョルノ。ギャングと堅気の差は多少つけるが、ギャングの中でなら男だろうが女だろうが贔屓はしねェ」それからやにわに立ち上がると、テーブルの上にあったポットを引っ掴み、リストランテの奥の方へ向かう。
　お茶を淹れるだけで大層な、とベルは思ったが、それよりもこれだけ仲間が大揉めしておいて周りが全然気にしてないというのが不思議だった。
「へへッ、アバッキオのやつ、のせられてやんの」

「はぁ、あの人ああ見えてかなり大人げないから……ベル、本当に無理に飲まなくていいですからね」
「ええ」
「お前たち、オレがいないといつもああして騒いでいるのか？　少しは迷惑ってモンを考えろ」
「わかったぜッ！　ブチャラティが言うならオレ、気をつけるッ！」
そしてそんなやり取りをしている間に戻ってきたアバッキオは、変わらず仏頂面のまま、どかりと椅子に腰をおろした。持ち返ってきたポットから新しいティーカップに中身を注いで、ほらよ、とベルの目の前に差し出す。
「ついでにオレにももらえるか？」
アバッキオはまるでブチャラティがそう言うのをわかりきっていたみたいに、ポットの蓋を開けて中身が空なのを見せた。
「悪いな、ブチャラティ。あんたのは別に頼んである」
言葉通りにすぐさまウェイターが、ブチャラティの分の紅茶を持ってきたのだった。
「ありがとう。頂くわ」
ベルはあからさまだなと思いつつも、自分の分のティーカップに手を伸ばす。皆の視線が痛いくらいだったけれども、ベルに苦みのリアクションを期待するのは無駄だ。

カップの中の液体は澄んだ黄色で、紅茶というよりカモミールなどのハーブティーのように見える。

しかし余裕ぶっていられたのはそこまでで、カップを持ち上げたベルはぴしりと固まった。

（こ、これは……冗談じゃあないッ……!!）

中身が何かなど、飲まなくてもわかる。微かに鼻についたアンモニア臭に信じられないとばかりにアバッキオを見るが、彼は開き直っているのかふんと鼻を鳴らしただけだった。皆がお茶一つであれほど盛り上がった理由も今ならわかるし、先ほどの話から推察するにジョルノはこれをどうにかして乗り切ったのだ。ベルは顔が引きつりそうになるのを懸命に堪え、持ち上げていたティーカップを再びテーブルの上に戻した。

「なァんだ、つまんねェーの」

「まぁ、そりゃそうだわな」

ベルのその行動に、場を包んでいた緊張感はふっと緩む。この液体の生産者ですらわかりやすくホッとした顔をしているのだから、なんともくだらない話だ。ベルはカップを覆うように身を乗り出すと、テーブルの端っこに追いやられていたシュガーポットを引き寄せた。

「ごめんなさい。せっかくだからストレートで頂こうと思ったけれど、私、紅茶には砂糖

を入れるって決めているのよ」

そう言って角砂糖をひとつぽちゃりとカップに落とし、スプーンを前後に動かして混ぜる。「溶けにくいわね、ヌルいのかしら?」茶化すように笑ってやれば怒りだすかと思ったけれど、それよりもアバッキオはベルの意図を測りかねて困惑しているようであった。もちろん、他の男たちもみな一様に、ベルが何をするつもりでいるのか固唾を呑んで見守っている。

だが、もう細工は済んだ後なのだ。シュガーポットを取るふりをして、ベルはちゃっかり〝トウッティ・フルッティ〟を発動させている。人間の尿の成分は九十八パーセントが水であり、残りの二パーセントはタンパク質の代謝で生じた尿素だ。淹れたてなお陰で無菌であるし、もはやただの砂糖水と化したそれを飲めないことはない。思い切り、心理的な抵抗を無視すればだが。

ベルはほとんどプライドの為だけに、まだ少し底に角砂糖の溶け残るそれを無作法にもぐいっと煽った。

ペイント・イット・ブラックの消失

「は〜〜、マジで最近の新人ってのはイカれた奴ばっかだな〜〜」

何故か後部座席のど真ん中を悠々と陣取ってバックミラーに割り込む気しか感じられないミスタは、まだ先程の興奮が冷めないのか馬鹿でかい声でそう言った。

イタリアの法律的に本来運転するべきは十八歳のこの男の方なのだが、曲がりなりにもチームのガンマンである彼の両手をハンドルに預けてしまうのはあまり賢くない。そういうわけで縄張り内のホテルにあるカジノを巡回するために車を走らせているのは、偽造した免許のわりによっぽど慣れた運転をする、まだ十六歳のフーゴであった。

「ジョルノのほうはともかく、ベルは新人ではありませんよ。この世界に入っての歴で言うなら、ぼくとそう変わらないはずです」

確か彼女がこっちの世界に足を踏み入れたのは、ブチャラティと同じ十二歳くらいだったと聞いたことがある。別にこのご時世ではそう珍しい話ではなくなってしまっているが、親を亡くして身寄りのなくなったベルはスリや観光客相手の詐欺で生活費を稼ぐしかなくなって。その腕前は年端のいかない子供のくせにギャングの耳に届くほどのものだったらしいが、ショバ代を払わないという妙な意地を張ったせいで目をつけ

られて。

捕まえてみて身なりを整えてみると存外綺麗な顔をしていたものだから、娼館に売られそうになったところを上手く逃げ出して。どうやったのか、自分を捕らえたギャングのお偉いさんとして当時既に塀の中にいたポルポの存在にまでたどり着き、娘を騙って手紙を何度も送りつけたそうだ。

わたしにお父さんのお手伝いをさせてください。わたしをただの女の子として働かせるのは勿体ないってもんです。なんだってやります。お父さんはいつになったら出られますか？　わたしが会いに行ってもいいですか？

字はお世辞にも綺麗とは言えなかったし、検閲を想定してか手紙には具体的なことは何も書かれていなかった。しかしその行動力と度胸、ふてぶてしさが面白いやつだと、塀の中で暇をしていたポルポの興味を引き、彼女は面会のチャンスを得る。その後のことは、ブチャラティチームの面々とそう大差ない顛末だろう。入団試験に晴れて合格した彼女はスタンド使いとなり、しばらくの間補佐と言う形で今は亡き前任者の後をちょろちょろついて回って、現在は一人でネアポリスの密輸事業を受け持つにまで至る。そういった経緯があるからポルポは〝パードレ（父親）〟の言うことをよく聞くんだな、とベルのことをからかうことがあるし、彼女もかつての名前を捨て、まるで犬や猫であるかのように〝ベル〟とだけ名乗っている。

まぁポルポの後ろ盾があったからこそ、彼女が若い女の身でありながら酷い目に合わずに済んだのだろうが。

簡単に彼女の過去についての噂を話したフーゴは、後部座席の男がわかりやすく飽き始めていることに小さく肩を竦めた。

「へぇ、そりゃあ波乱万丈の人生で。でもよォ、だったらアバッキオの今回のプレイはちっとマズイんじゃあねぇか？　うちの可愛い娘っ子に一体なんてモン飲ましてくれてんだってあのタコさん真っ赤になるかもしんねーぜ」

「面子のためにあれを飲むようなプライドの高い人が告げ口なんてしませんよ。それに彼女はポルポに信頼されているようだけど、特別扱いをされているわけじゃあない。そこはなんてったってギャングですから」

ちょうど彼女が前任者から仕事を引き継いだばかりの頃だったろうか。取引相手に小娘だと軽んじられ、腹と両足に銃弾を合わせて五発も食らい、病院に運び込まれたことがあった。その知らせを聞いたポルポはあっさりと彼女の後任の人事について考え、〈パッショーネ〉の面目の為にブチャラティに報復を命じたのだが、なんと当の本人が病院を抜け出して敵のカルテルに乗り込み、トップの首を挿げ替えてきたのだから世話はない。もちろんそれはブチャラティのサポートあってこそだったが、それでもその気概が流石にギャングの女だ。ただ愛玩されて今の地位を得ているわけではない。

「まぁ～～どうせあいつも本当に飲んだわけじゃないだろうしな……で、オレはそのタネが知りたくて、わざわざお前について来たわけなんだが……？」
「はぁ？」
　不意にぐい、と後ろから身を乗り出され、いよいよバックミラーにはミスタしか映らなくなる。怪訝そうな表情を前面に押し出し、たった二文字で話の続きを促せば、彼はにやりと悪だくみをするような笑顔を浮かべた。
「だってよォ、あいつもケチだから教えてくんねーんだもん。フーゴ、お前ベルのスタンド知ってんだろ？　オレにだけこっそり教えてくれよ～～」
「知りませんよ」
「そ～～冷たいこと言わずにさ、フーゴから聞いたって言わねーからよォ」
「だから知りませんってッ！邪魔ですから、ちゃんと座ってくださいよッ！」
　ほんの小さな子供ならいざ知らず、ミスタの体格で座席シートを後ろに引っ張られれば、運転しにくくってしょうがない。思わずかっとなって怒鳴りつけたフーゴだったが、それに負けじとミスタも声を張り上げる。
「なんでだよッ!?　お前ら知り合いなんだろッ!?」
「そりゃあ同じネアポリス担当としてそれなりの付き合いはありましたけど、これまではあくまで”仲間”ではなかったですし。彼女の方もぼくのスタンド能力を知らない

と思いますよ。あ、でも一緒に戦ったことのあるブチャラティはお互いの能力を知ってるだろうな」

「チェッ、なんだよそれッ。じゃあ仕事になんか着いてこずに昼寝してりゃあ良かったぜッ」

それで珍しくミスタが自分から名乗りを上げたのか。別にフーゴ一人でも十分なところへわざわざ着いてきたがるから妙だなと思っていたが、本当にどうしようもない男である。

しかしベルの能力は、正直フーゴも気になっている。あれは確かに密輸事業に適任だな、と前にブチャラティが褒めていたことがあったけれど、何か物質を隠すような能力なのだろうか。それでアバッキオの振舞ったあれを……いや、液体は確かにカップにあったはずだ。

「はぁ、もう着きますよ。アンタも少しはあのジョルノの意欲ってもんを見習ったらどうです?」

視界の先に目当てのカジノを有するホテルを捉えたフーゴは頭を振って、回想したくもない場面が脳裏に過るのを追い払った。たとえ実際に飲んでいないとしても、やはり気分のいいものではないのだ。飲まれた側に当たるアバッキオの方も流石に特殊な性癖は持っていなかったようで、自分の行動を棚に上げてドン引きしていたのだから本当

に茶番でしかない。

そしてその被害加害関係にあるベルとアバッキオ、それからアバッキオを焚きつけた張本人のジョルノは今、別の仕事で三人揃ってカポディキーノ空港の方に行ったのだから、向こうの空気が一体どうなっているのか考えただけでも恐ろしかった。

「意欲？　ありゃあ明らかに新人イビリの延長だろうがよ」

「アバッキオはジョルノに乗せられただけですよ。あの人、一応元警官ですから、あれで女子供を虐めて喜ぶタチでもないし」

「違えよッ。どう見てもイビッてんのはジョルノのほうだ。このチームじゃたった二日先輩なだけだが、生意気にベルを監視してやがるぜ、あれは。空港に行くって言ったのもベルが先だったろ」

確かにそう言われるとそうかもしれない。ジョルノがお茶に拘ったのはアバッキオに対するあてつけかもしれないが――実際、あれが堪えたのはベルよりもアバッキオであるように見えた――涙目のルカが死んだあと空港周辺のルールが乱れ始めているという問題に対し、視察の名乗りを上げたのはベルが先だ。ルカが麻薬に関わっていたというナランチャの証言もあって、ベルは早速調査を進めることにしたらしい。

彼女は元々空港内の取引を担当していたのだし、一時的なことだとしてもあの周辺を治めるには適任であると言えるだろう。そこへジョルノがぼくもあの辺りで少しバイ

トをしていたことがあるので多少顔が利きます、と手をあげ、新入りばっかで行ってどうする、と苦言を呈したアバッキオがオウンゴールをするようにグループに組み込まれたのだった。

「でも……なぜジョルノがベルを監視するって言うんです。後輩に先輩面したがるほど、可愛げのある男でもないでしょう」

それこそ新しく〈パッショーネ〉に入ったジョルノは突然ブチャラティがごり押しする形で連れてきただけで、フーゴも全く素性を知らない。別に他のメンバーのようにブチャラティに救われたわけでもなさそうだし、今でも寮付きの学校に通っているくらい、こっちの世界とは全く関係のなさそうな少年だった。そしてそういうおキレイそうな世界の空気を吸っているくせに、妙に肝の据わった態度でそれがまた生意気であるとアバッキオの気に障る。まぁブチャラティがやたらとすごい男だと目を輝かせるから面白くない、というのは他のメンバーにも共通する感情だった。むしろそれを素直に表に出せるアバッキオのことを、捻くれた性格のフーゴはちょっぴり羨ましく思っていたり……。

フーゴがそんならしくもない不毛な羨望を自覚してしまったその後ろ、ミスタはふふん、となぜか得意げに鼻を鳴らした。

「まぁ、こればっかりはいわゆるオトシゴロってやつじゃあねーの？　二日とはいえ後

輩に可愛い女の子が入って、あのスカしたジョルノも舞い上がっちまったんだって」
「馬鹿馬鹿しい。それであのお茶を勧めるもんですか」
「そこはほら、まだ十五のガキだからよォ。気になる子にはつい意地悪しちゃうってな」
「女学生じゃあないんだから、恋愛脳も大概にしてくださいよ」
「へいへい、わかってるよッ。あ〜〜つまんねーのッ！」
お気楽なミスタも流石に本気で言ったわけではないらしく、フーゴが適当にあしらうととうとう拗ねたようにお喋りな唇を引き結ぶ。
しかしそれもほんの束の間のことで、ホテル裏側の駐車場に車を止めた二人が車外へ出ると、ミスタはすぐさまおいッ、ありゃあなんだッ!? と素っ頓狂な声を出した。
「もう、今度はなんで……す、か」
騒がしい男だ、とつられるようにして、視線をやったホテルの関係者出入り口。見れば大きなボストンバッグを抱えた男が転げるようにして飛び出してきたところである。そのあまりの勢いと必死な形相に一瞬、強盗か!? と身構えたが、現状を確認するよりも先にただただ男の異様な出で立ちが目を惹いてフーゴは固まる。男の首から下が、まるでコールタールでも引っかぶったように真っ黒なのだ。それは全身黒づくめのボディースーツを着ているとかそういう話ではなく、真夏の影法師のように境目がない。
ミスタは既に、愛用のリボルバーをその手に構えていた。

「ア、アンタらッ！　ブチャラティんとこのッ！　助けてくれぇぇッ!!」
　男の方もこちらに気づいたようで、悲痛な叫びを上げる。フーゴはその顔に見覚えがあった。見覚えと言うか男はこのカジノのいわゆる経理担当者で、今まさにフーゴたちが収益を回収しにあがった相手なのである。男の身体は初め、ホテルを飛び出した勢いのまま通りを挟んだ敷地外へと向かっていたが、〝ブチャラティ〟の名がその口から出るなり、ブレーキペダルを力いっぱい踏みでもしたかのように人間とは思えない動きで急停止した。そしてくるりと方向を転換すると、抱えていたボストンバッグをその場に打ち捨て、真っ黒に蝕まれた身体のまま一直線にこちらに向かってくる。
「ミスタッ！」
「もう撃ってるッ！　ピストルズ、とりあえず足だッ！　動きを止めろッ！」
　イクゼーッ!!　と元気いっぱいな掛け声とともに発射されたのはＮｏ．１とＮｏ．２か。遮蔽物もない以上、狙いに狂いはない。しかし男に付着しているあの黒いものはおそらく〝スタンド〟で、ピストルズが取り憑いてスタンドエネルギーを付与した弾丸でなければダメージは与えられないだろう。
　だが、きっちり二発の弾丸が男の両足に一つずつぶち込まれたかと見えた瞬間、ピストルズの困惑の声が響き渡った。
「ウゲェーーッ！　クロイノガハガレタゾーーッ！」

「ミスターーッ！　コイツキモチワリィヨーーッ！」
「バ、バカなッ！　かわしやがっただとッ!?」
　正確には弾丸は、ちゃんと男の両足を撃ち抜いている。が、肝心のタール状のスタンドは、着弾の瞬間にモーゼを迎える海が如く、左右にさっと分かれて回避していた。そして撃たれた男の足を再び動かしてこちらに迫ってくる。
「あの黒いのに触れないようにしてくださいッ！　おそらく、あれに憑かれると自由を奪われるッ！」
「でもよッ、こっちに向かってくるんだぜッ！」
　ミスタは続いて腹部に向けて二発発砲したが、結果は同様だ。というか、いっそまだスタンドに覆われていない頭部を狙ったら――操られている者が死亡したらこのスタンドはどう動くのか。向かってくる男から必死で距離を取りつつ、フーゴはあることに気づく。それはいつの間にか男の目の下まで、黒い部分が侵食していることだった。
「ミスタッ！　もういいッ！　頭だッ！」
　フーゴがそう言うのと、ミスタが引き金を引くのと、一体どちらが早かっただろうか。まだかろうじて綺麗だった眉間を撃ち抜かれた男は反動でのけぞり、どうっと後ろに倒れ込む。「や、やったのか……ッ!?」近づいて覗き込むような愚は犯さない。地面にじわりと広がっていく液体は今や男の全身を包んでいる黒色とは違い、確かに真っ赤なもの

であった。
「操作する対象を失っただけでこいつ自体はまだ死んじゃあいないッ！　近くに本体がいるはずですッ！」
　言いながら素早く周囲を見回すが、特に不審な人物は見当たらない。遠隔自動操縦タイプなのだろうか。それにしては後生大事に抱えてきたボストンバッグを投げ捨て、真っすぐこちらに突っ込んできた。
　目撃者を排除するつもりだった？　いやそれにしてはこの男が方向転換したのはブチャラティの名前を、この男自身が出した時で――。
「フーゴッ！　こいつ消えてくぞッ！」
　見ればミスタの言う通り、真っ黒の人型をしたそれは端のほうからまるで蒸発でもするかのように消えていく。しかも消えるのはスタンドだけではなく操られていた男の身体ごとで、物の数秒もしないうちに辺りは元の静けさを取り戻した。今や地面にのびた血痕と男が抱えてきたボストンバッグのみが、この騒ぎが現実であったと証明するものとなっている。
「……とりあえず、ブチャラティに報告を」
　フーゴは息を吐ききるようにして、そう呟いた。
　今日ばっかりはミスタの気まぐれに、感謝してやってもいいかもしれないと思いなが

ら。

ナイティナイン・プロブレムスの災難①

ペッシェ・ドゥ・アプリーレ――イタリアで「四月の魚」を意味するこの日は、世界各国でも嘘をついていい日として有名だ。他愛ない冗談めいた嘘はもちろん、お決まりの悪戯として魚の絵やシールをこっそり人の背中に張り付けて笑うというものがある。どうして魚なのかはこの慣習をイタリアに持ち込んだお隣フランスに聞いてほしいところだが、この時期になると菓子屋やバールはこぞって魚の形をしたチョコレートを売りに出すし、楽しいことが大好きなイタリアーノはどんなユーモアを披露してやろうかと皆こっそり頭の中で算段しているものである。

▪

だからブチャラティがチームに女を入れるなんて急に紹介してきたのも、ボスに目を付けられるかもしれないのに麻薬の流通まで弄くろうなんて言うのも、今日がその四月一日だからに違いない。

アバッキオは車窓からネアポリスの街並みを眺めてそんな現実逃避をしていたが、あの真面目なブチャラティがこんなタチの悪い冗談を言うわけがないとも理解していた。

そりゃあ、確かにあの人はギャングらしからぬ茶目っ気があって街の子供たちからも懐かれているが。

去年はいつも通りの飄々とした態度でナランチャ相手に、ネアポリスに大型カジノができるから今後はお前がナランチャチームを作って治めるんだぜ、と大嘘を言ってのけたり——ブチャラティに心酔しているナランチャにとっては笑えない話だった——嘘をつくとしてもそんな罪のない程度の可愛い冗談だ。そうそう、うっかり本気にしたナランチャがフーゴに泣きついて、二桁のかけ算もできない人がカジノなんてお金の出入りの激しいとこにやれるわけないでしょう、と呆れられたんだったか。

いけないとは思いつつも、アバッキオの思考は緩やかにそれていく。もちろんそうやってぼんやりしていても、相変わらず表面上は眉間に皺を刻んで不機嫌そうに見えるのだからこういう仕事でなければ損な面構えだったろう。

「あのさぁ、」

しかしそんなアバッキオの表情にも全く怯えも躊躇いも見せず、話しかけてくる勇者がいる。これがいつもの仲間ならば慣れているからだと納得できるが、彼女の態度はアバッキオの目にはどうしても生意気に映った。気のきつそうな、マラカイトグリーンの瞳が真っすぐにこちらを射抜いてくる。

「……あぁ？　なんだよ？」

助手席から半ば身を乗り出すようにして振り返ったベルは、アバッキオに負けず劣らず険しい顔をしていた。

「さっきから辛気臭い顔して……気にしてるようだから言わせてもらうけど、さっきのアレ本当に飲んだわけじゃあないからッ！」

ビシィィッ、と音が鳴りそうなほどの勢いで指を突き付けられ、アバッキオは思わずちょっとのけ反ってしまう。別にリストランテでの一件に思いを馳せて黙り込んでいたわけじゃあない。だが改めて口に出されると気まずいのも本当なので、かあっと顔面に熱が集まった。

「ッ、気にしてねぇしわかってるッ！」

とはいえ、正直なところ現実逃避したくなる一番の原因は女がチームに入ったこと自体より、先ほど自分がこの女にやった仕打ちのほうだった。警官、ギャング、と体育会系の男社会で過ごしたアバッキオは、女の生意気な後輩をどう扱っていいのかわからない。しかもチームでは後輩だが、ギャング歴でいうなら彼女はアバッキオよりずっと長いのだ。

最近ブチャラティが相談なく新しい人間を入れるのが不満だったのと、その新人ジョルノに煽られたことでついやらかしてしまったが、アバッキオは時間が経つにつれ、罪悪感を覚えずにはいられなかった。彼はそのスタンドに反映されているように実に内

省的で、後から一人で考え込んでしまうタイプなのである。

そして〝あれ〟を飲んでいないと言うことは、やはり彼女はスタンド使いであり、自分の能力でなんとかしたということだった。ブチャラティチームは先日二十一になったばかりのアバッキオが最年長であるように非常に若いメンバーばかりで構成されているが、ベルもせいぜいフーゴかミスタあたりと変わらないくらいだろう。その若さで密輸事業を仕切って、これまで一人でやってきたというわけだ。生意気なのではなく、舐められないように片意地張って生きてきただけ。

麻薬うんぬんに関しても最初に聞いたときは絵空事だと思ったが、皆の前で説明する彼女の瞳は真剣だった。この計画をいつか実現するために、密輸事業の担当を志願したのだと。それくらい本気なのだと。

――気に入らねぇ。気に入らねぇが……これまでの実績だけは評価してやる

アバッキオはじりじりと焦げ付く嫉妬と羨望を感じながら心の中で呟いた。彼女が自分にできなかった信念を貫こうとしているのが、まだ折れてしまわずにその途上にあるのが、酷く眩しくて羨ましかった。

そしてまだ多くは知らないながらも、アバッキオは強い意志の片鱗を彼女の隣のジョルノにも感じている。ブチャラティの目の色を変えさせたそれを、密かに脅威に感じている。ジョルノは何を考え、何のために組織に入ったのか。彼のメンバー入りが、この

チームに何をもたらすのか――。

実はアバッキオが未来について考えるのはとても珍しいことだったのだが、本人はそのことに全く、これっぽっちも気がついていないのであった。

「それにしても涙目のルカが薬の方面まで手を出してたとは知らなかったわ。組織には上納してるんでしょうけど、ポルポにも黙ってあんな何の能力もないチンピラが……盲点だった」

腰を浮かせるようにして座りなおしたベルは腕を組んで、ほとんど独り言のようにそう言った。

後部座席からでは前を向く彼女の表情は窺えないものの、聞こえてきたその声にはありありと悔しさが滲んでいる。

「ナランチャが言っていましたね、子供にも売っていたと。でも、ポルポは本当に知らなかったんでしょうか？」

十五のくせに少しの危なげもなく運転しているジョルノは、彼女のその呟きを拾うことにしたらしかった。

「見て見ぬふりをしていた……その可能性は高いわね」

「では、どうして今になって突然あなたを寄こしたんです？」

「……そりゃあ、物事には限度ってモンがあるからよ。これだけはどうしても超えちゃ

あいけない、許しちゃあいけない、そういうラインが何にだってあるの。死にたがりが好きでトブのは勝手だけれど、右も左もわからないガキの背中を押してトバせるのはちょっとばかし罪深いんじゃあないかしらってね」

彼女は年下の少年を教え諭すようにそんな弁舌をぶったが、肝心の少年の方は黙っただけで、なるほどの一言すら発さない。車内を奇妙な沈黙が包み、走行に伴って車体が小刻みに振動する音がやたらと大きく耳についた。「おいッ、」いや、音だけではない。車自体が本当に揺れている。そのがたつき具合は悪路によるものではなかったらしく、ジョルノのハンドルを持つ手には力が入っている。

するといくらも経たないうちにバンッ、と心臓を握りつぶさんばかりの破裂音がして、車はずるりと反対車線の左へと滑った。ジョルノが素早くハンドルを切らなかったら、危なかっただろう。

幹線道路を外れて細い通りに入り込み、なんとか路肩に車を止めることができたときには全員が胸を撫でおろした。

「タイヤがパンク……いえ、これはバーストしたみたいですね」

車を降りてタイヤを確認したジョルノは、左前輪が酷く裂けています、と短く報告した。確かにさっきの音からして、パンクなんていう生易しいものではないだろう。アバッキオもベルも続いて車から降り、他のタイヤには異常がないことを確認する。

「何やってんだよ、釘でも落ちてたのか？」
「いえ。そもそも車に使用されているほとんどのタイヤはチューブレスタイプですから、釘が刺さったからといってすぐにパンクするわけじゃありません。ましてやこんな風に破裂するなんて妙だ」
「空気圧が減ってたわけでもないのよね」
「借りてきたばかりのレンタカーですしね。そのあたりはきちんと整備されていると思いますが」
　疑問は残るが、いつまでもこの場で途方に暮れているわけにはいかない。空港まではあと一キロほどだし、歩いたほうが早いだろう。あまり遅くなると警備員が夜の顔ぶれになってジョルノの顔が利かなくなるし、誰も口には出さないまでも今日もう一度車に乗るのは勘弁してくれという気分だった。
　空港までの道のりにちょうど車屋があったのも大きい。行きがけにそこへ声をかけておいて、調査をしている間に修理してもらう。そういう算段をして、三人はそこから徒歩で空港に向かうことにした。
「チッ、ツイてねぇな」
「別に大きな事故になってないんだからいいじゃない」
「いや、今日は色々と厄日だぜ……」

言ってからしまった、と思ったが、彼女はあからさまにムッとした表情になった。
「厄日って言いたいのは私のほうだわッ」
とんでもないもの飲まされそうになるし、という追撃に、アバッキオは冷や汗をかく。しかしここで悪かったと素直に言える男であれば、そもそもジョルノに対してもあんなイビリ方はしなかっただろう。決まり悪さを誤魔化すようにわざと大股で歩き、ずんずん彼らとの距離を引き離すと、アバッキオ！　と後ろから生意気な少年に大声で名を呼ばれる。
「あぁッ？　なんだよ、文句あ……」
振り返った瞬間、目に飛び込んできたのはこちらに真っすぐ突っ込んでくる自転車。慌てて飛びのけば、ドライバーはそのまま歩道の脇のゴミ箱に派手にぶつかりひっくり返る。
「あ、あぶねぇだろッ！」
「す、すみません、急にブレーキが変になっちゃってッ！」
幸いにも自転車のカゴがぐにゃりと歪んだだけで、怪我はないようである。が、それにしてもさっきから心臓に悪い。これは本格的に厄日なのかもしれない、とアバッキオが思い始めたところで、駆け寄ってきたジョルノが「厄日ですね」と駄目押しした。そのジョルノの後ろではベルが通りすがりの子供にジェラートをぶつけられているし、そ

うかと思うとなんだか焦げ臭い匂いと煙が通りに立ちこめる。
「おいッ、ジェリーノの店でボヤ騒ぎだッ！」
「あのオッサン、キッチン新しくしたばっかって言ってなかったかッ!?」
「とりあえず、水だッ！　バケツッ！」
　近くの商店の者がこぞって水の入ったバケツ片手に火元に向かい、そのうちの一人が石畳の隙間に足を取られて盛大にすっ転ぶ。空を舞ったバケツの水は、見事にジョルノを頭から濡れ鼠にした。
「ハッ、どうやらてめえも厄日らしいな」
　ここでジョルノが苦笑でもしたのなら、ちょっとはアバッキオもこの新人に心を許したかもしれない。不運というのは時として、奇妙な連帯感をもたらすからだ。
　だがジョルノはびしょ濡れのまま顎に手をやると、やはり妙だ……と考え込んだ。
　それを見たアバッキオは、やっぱりどうもこいつは気に入らねえ、と不機嫌そうに鼻を鳴らしたのだった。

ナイティナイン・プロブレムスの災難②

――落としたトーストがバターを塗った面を下にして着地する確率は、カーペットの値段に比例する。

まだ湿り気の残る髪をそよがせながら、ジョルノはふと、そんなユーモラスな法則を提唱したアメリカの空軍少佐の本の内容を思い出していた。もちろん、それらははっきりと実験に基づいて証明された事実ではなく――むしろカーペットよりトーストを落とす高さに依存するらしい――先達の経験から生じた哀愁に富む経験則でしかないのだが、こうも良くないことばかりが続くとつい、〝運〟なんてものに思いを馳せてしまうのだった。

というのもタイヤのバーストに始まった不幸はその後、空港に着くまでの道すがらひっきりなしにやってきて、むしろどんどん悪化していると言ってもいい。対象もジョルノ達だけに限らず、火事が起こったり、店先のショーウィンドウが割れたり、水道管が水漏れしたりと、街の人々にも等しく無慈悲に降りかかっていた。

そしてそれらの災難をネアポリスの街を回護している〝良心的なギャング〟である

ブチャラティチームは無視するわけにもいかず、なんだかんだと指示を出したり手伝ったりとしているうちに三人はすっかり疲れてきってしまっていた。その間にこの強面で排他的な先輩が、存外面倒見が良くて街の人にも慕われているのだと知ったりもしたのだが。

「まさかとは思うけど、空港に行ったらテロリストが……とかないでしょうね」

「やめろよ、縁起でもねぇ……」

「自分を幸運と思っている人には幸運が舞い込み、不運だと思う人は不幸になるそうですよ」

「それはミスタじゃねぇか」

　しかしバスターミナルが見えてくると、ベルの危惧を裏付けんばかりになんだか騒然としている。ジョルノはタクシーの乗り場付近で見知った顔の警備員を見つけると、事情を聴くために声をかけた。

「どうも、お仕事お疲れ様です」

「あ？　あぁ、お前か。だが今日は駄目だぜ、第一ターミナル閉鎖の厳戒態勢だ」

「何があったんですか？」

　警備員の男たちの表情も、同様に疲れ切っている。この空港には第一、第二と二つのターミナルが存在するが、滑走路の北側にある第二のほうはチャーター便専用で、一般

のフライトは第一ターミナルを使用する。その第一が閉鎖されているのであれば、実質この空港は機能していないも同然だった。

「乗客の手荷物で不審物が発見されたんだと。で、普通なら保安室行きってだけなんだが、奴さんどうも何を持ち込んだか口を割らねぇんだもんで、爆発物なんじゃあねぇかってサツまで呼ぶ騒ぎになってよォ」

「オレが聞いた話じゃあ、本人は〝テクニカルなもの〟だって言葉濁してるらしいぜ」

「テクニカルなもの？」

「そりゃあお前、大人のオモチャってやつさ、たぶんな。まぁサツが来てからもう一時間も経ってるしどうせ間違いなんだろうけどよォ～、欠航便も出てるしいい迷惑だぜ」

「しかも今日は四月一日だろ？　なかなか皆信じなくて避難させるのも一苦労だったな～」

警備員たちはちょうど愚痴を言える相手を探していたらしく、聞いてもいないことをべらべらと語りだす。だがそのおかげで空港の状況はよくわかったし、ベルの杞憂はテロリストまではいかなくとも当たっていたわけだ。

「こりゃあ調査どころじゃあねぇな」

「そうですね……」

別にジョルノ達は空港の中に用事があるわけではないが、こうも混乱しているようで

はこの周辺を縄張りにしている者たちも通常営業とはいかないだろう。ひとまず今日のところは出直すかと引き返そうとしたところで、タクシー乗り場の先に妙な男が立っているのが目に入った。

「ねぇ、あんな奴さっきまでいたかしら……？」

「いえ、気が付きませんでした……」

日に焼けた褐色の肌に、強いウェーブのかかったブルネットを肩まで伸ばしたその男は、腕の中に一匹の白ウサギを抱いて人目も憚らずに大泣きしている。

「オレぁ、人を探してるんだァ～！　オレの幸運のうさぎさん、教えてくれよォ～ッ！　こんなかにオレの探している奴はいるかい、いるならどうか教えておくれよォ～ッ！」

どう見ても気が触れているとしか思えない男の言動に、欠航便のせいで行き場を失っていた人々がさあっと離れていくのがわかる。男はウサギ以外の荷物を持っていないようで、とてもじゃないが空港の正規な利用客には見えなかった。滑走路の芝生の方にはウサギが数匹住み着いているものの、ウサギの懐き具合を見るにどうもそこから拾ってきたというわけでもなさそうである。

「オレはよぉ……幸運な男だから、ここで待ってりゃ向こうから犯人がやってきてくれんだ。なぁウサギさん、そうだろォ？　ウサギの足ってのは幸運を運ぶお守りになるんだ。お前がいりゃあ、このあたりの幸運は全部オレのモンなんだ。さぁ、教えておくれ

よォ〜ッ！」

　すると男の声に応えるように、不意にウサギがぴょん、と地面に降り立った。そして小さな鼻をくひくひと動かすと、まるで麻薬捜査犬のように近くの人間の足元を行ったり来たりする。その様子はとても可愛らしかったが、なにぶん飼い主の異常性が際立っているので近寄られた人間の方はたまったものではない。ウサギを避けるようにして人垣はさらに割れ、とうとうジョルノの足もとまでたどり着いた〝それ〟は、警戒するようにピンと耳を立て、上体を起こした。

「ねぇッ、ジョルノ！　そのウサギ、足が変よッ……！」

　二足で立ち上がったことで晒されたウサギの腹には、まるで乳房のように余分な足が何本もぶら下がっている。ぎょっとしてジョルノが一歩引いた瞬間、先ほどまで泣いていた男の怒声が響き渡った。

「そうか、そうか、そいつがやったのかッ！　〝涙目のルカ〟さんを殺ったのはそいつかぁあぁぁーーーッ！」

　突然豹変した男の態度に、今度こそ人々はなりふり構わずその場から逃げ始めた。困惑、混乱――しかし、ジョルノ達の動揺は頭のおかしな人間に絡まれたことが理由ではない。男の口から出た〝涙目のルカ〟の名前、そしてその犯人がジョルノであるという内容に、ベルもアバッキオも呆然としてしまっていた。

「許さねぇッ、許さねーからなァアーーッ！　這いつくばって後悔させてやる、テメェは絶対に幸せになれねぇッ！　ナイティナイン・プロブレムスッ！　ターゲットはそいつだ、地獄を見せてやれッ!!」

攻撃されるッ――！

身構えた三人だが、ウサギ型のスタンドは噛みつくわけでもひっかくわけでもない。ただ、ジョルノの前でとん、と足を踏み鳴らすと、すぐに踵を返して飼い主の腕の中に駆け戻った。男もそれを抱きかかえると、迷いなく走り去っていく。

「な、なんなんだよ、今のはッ……！」

アバッキオの呟きは、正しく三人の心境を表していた。わけがわからない。一体今のはなんだったのか。

「追いかけましょう」

しかしさっきの男は〝涙目のルカ〟の名前を出した。一応スタンド使いであるようだし、このまま放っておくわけにもいかない。真っ先に我に返ったジョルノが後を追おうと走り出したところで、鬼気迫ったクラクションの音が耳をつんざく。タクシーだ。なぜかタクシーが歩道を乗り上げて、まっすぐこちらに突っ込んで来ようとしている――ッ！

「ジョルノッ！」

「ゴールド・エクスペリエンスッ！」

真横からやってきた車に対し、ベリーロールをするように転がってボンネットに乗り上げる。衝撃はもちろんあるが、自動車事故で恐ろしいのは車の下敷きになることだ。すぐにボンネットから伸びた蔦がジョルノの身体がそれ以上どこかに転がって落ちることが無いよう優しく受け止める。ガラス張りの空港の外壁は惨憺たる様になったが、その破片からも蔦は見事にジョルノを守り通した。

「おいッ、大丈夫かッ!?」

「ええ、なんとか……」

ゆっくりと身を起こし、ジョルノが無事な様子を見せると、アバッキオもベルもわかりやすく安堵の表情を浮かべる。あれだけ大人げないやり方でジョルノのメンバー入りを拒んだくせに。スパイか刺客かはっきりしないものの、ポルポのところから堂々と派遣されてきたくせに。

しょうがない人たちですね……とまだ少し眩暈のする頭でジョルノが考えていると、不意にベルに思いっきり突き飛ばされる。「なッ!?」だが、それでよかったのだ。そうでなければ今頃ジョルノは頭上から降ってきた外壁ガラスを支えるフレームに、串刺しにされていたところであった。

「……すみません、助かりました」

「不運にする、それがあの男の能力ってことかしら」
「そのようですね。厄介だな……とにかく今のぼくに近寄らないほうが……」
　こうした不運が連発するようになったのは、ちょうど空港から一キロくらいの距離だったろうか。射程距離というか範囲の広い能力のようだし、これまでは様々な人間に降りかかっていたものが、ターゲット指定されたことでジョルノ一人の身に降りかかると考えたほうがいい。
　さて、一体どうしたものか……。
　考え始めたジョルノの思考を遮ったのは、アバッキオの低い、詰問するような声だった。
「さっきの男の話だが、お前がルカを殺ったってのはマジなのか？　ブチャラティは見つからなかったって言ってたが……スタンド使いが出張ってきてるってことは組織がらみの、結構ガチな状況だぜ？」
「……お二人は帰ってブチャラティに報告してください。これはぼく個人の問題ですから」
「いいえ。私はジョルノに着いていくわ。あの男がルカに関わりがあるのならどのみち放ってはおけないもの」
「迷惑です」

「はぁッ!?　お前な、さっき助けてもらっといてその言い草……!」
　素直なところのあるアバッキオはジョルノの態度に腹を立てたようだったが、そんなものは計算づくだ。この男はこうやって怒らせた方が、勝手にしろ、と言って放っておいてくれるに違いない。
　しかしベルのほうはもう一度、静かに「着いていく」とだけ繰り返した。
「危険です、あなたを巻き込むわけにはいかない」
「……本音を言ったら?」
「……そうですね。ぼくは初対面の能力者を信用するほどお人好しじゃあないんです。あなたの能力がわからない以上、背中を預ける気にはならない。特にこんな、何が起こるかわからない状況では」
　ジョルノだって、今日一日を通して彼女が〝悪い人〟ではないということくらいは薄々感じ取っている。だが、彼女をここに寄こした彼女の上司はそうではない。今、咄嗟のことで自分の能力も見られてしまったわけだし、二つ返事で彼女の同行を受け入れるわけにはいかないのだ。
「……いいわ、あなたの能力もわかったことだし。植物を生やす能力なんて素敵じゃない」
「ええ、気に入ってもらえてよかったです」

「私はね、炭素を含むものなら砂糖に変えられるの。そういう能力」
　言って、ベルはジョルノが生やした蔦に手を伸ばす。「あ、」止める間もなく、その蔦が数センチほどさらさらと粉になったところで、驚いたようにベルが手を引っ込めた。彼女の手の小指が同じように端っこから砂糖に変わってしまったからだ。
「あの、ぼくが生み出した植物に対する攻撃は本人に返るので気をつけてください」
「そ、それを先に言いなさいよッ、バカッ！」
　どうやら砂糖から元に戻すこともできるらしく、慌ててかがみこんだベルの小指はちゃんとくっついていたが、今の焦りっぷりは少し面白かった。思わず口角が上がってしまったのを誤魔化すように小さく咳払いをしたジョルノは「で、」とアバッキオの方を見上げる。能力を知らないことに関しては、彼の方も同様だからだ。
「オ、オレは能力を見せる気もねぇし、お前に着いていくのもごめんだッ」
「そうですか。では、ブチャラティへの連絡はお任せします」
　不幸を呼ぶスタンド能力者なら、できるだけ被害が出なさそうなところに行きましょう。
　ジョルノがあっさりと引き下がり、次の行動について口にするとアバッキオは苦り切った顔になった。そして彼は次に、ジョルノが想像した通りの言葉を言う。
「勝手にしろッ！」

ペイント・イット・ブラックの共犯

『オレぁ、人を探してるんだァ～！　オレの幸運のうさぎさん、教えてくれよォ～ッ！　こんなかにオレの探している奴はいるかい、いるならどうか教えておくれよォ～ッ！』

日に焼けた褐色の肌に、強いウェーブのかかったブルネットを肩まで伸ばした男が、腕の中に一匹の白ウサギを抱いて人目も憚らずに大泣きしている。

その姿かたち、言動は先ほどアバッキオが目にしたものと全く同じものであったが、ただ一つ、男の額にはデジタルのタイマーが輝いているという違いがある。

「……よしッ。ムーディ・ブルース、そのまま早送りで巻き戻せ」

確か、空港で不審物騒ぎあって警察が呼ばれたのは一時間前だと言っていた。今回のこの空港閉鎖もあのスタンド使いの引き起こした〝不運〟によるものだとしたら、あの男は一時間前までは少なくともこの周辺にいたということである。

果たしてアバッキオの予想通り、男の姿をとったムーディ・ブルースは倍速で周辺をうろうろと歩き始めた。どうやら定期的にああして大泣きしつつ〝涙目のルカ〟殺しの犯人を捜していたようで、本当に気味の悪い男である。この辺では見かけない顔だがどうも組織の人間であるみたいだし、もしかするとこの男の他にもスタンド使いの仲間

がネアポリスにやってきているかもしれない。
「チッ、ジョルノのやつ、入って早々厄介ごと持ち込みやがって……」
まだ仲間として認めていない二人に、自分の能力を明かす気はない。
そういうわけでジョルノ達が去ったあと、アバッキオは一人で敵を探るために自身のスタンドであるムーディ・ブルースを発動していた。思わず漏れた悪態がそのまま本心を表しているのだけれど、彼はこの行動がジョルノの為であるというのを絶対に否定するだろう。これだけ騒ぎになっているならネアポリスの平和的な意味で無視できないからだとか、そんな理由をつけて……。
『おう、そうだ。なぁに、大丈夫だって！　アルゲーロ、お前の能力なら一人だって大丈夫さ！』
額のタイマーがちょうど二時間前を指した頃だろうか。空港の出口の案内板の前で、男は隣の誰かに向かってそうやって話しかけている。アバッキオは早送りを止めると、通常の速度で男達の会話に耳を傾けた。
『あぁ、こっちはオレに任せとけってッ！　絶対にルカさんを殺した犯人はオレが見つけてやるさ。オレの幸運のウサギさんがいりゃあ、どう転んだって悪いことにはなりゃあしねぇ』
『だ、だけどよう、マルチェロは幸運かもしれねぇけど、オレは……』

『だから犯人を見つけるまでは別行動するんだろうが。ちゃんと見つけたらお前にも教えてやるよ。な？　だからお前はその間、あのブチャラティの邪魔をしてやるんだ。殺しちまってもいいぜ？　ルカさん殺しの犯人も見つけられないような無能が、このネアポリスのチームリーダーなんておかしいモンなァ』

ブチャラティだと!?

アバッキオは〝再生〟された思わぬ名前に、知らず知らずのうちに拳を固く握りしめる。これはいよいよ放ってはおけない。アルゲーロとマルチェロという名の二人組は、〝涙目のルカ〟の仇としてジョルノを狙うだけでなく、その調査にあたったブチャラティにまで恨みを持っているようなのだ。

アバッキオは一度ムーディ・ブルースを解除すると、その場ですぐさまもう一度〝再生〟を命じる。今度のムーディ・ブルースは北欧の血が入っているのか、ブロンドの髪に青い瞳の小柄な男の姿を取った。今にも泣き出しそうな困り眉が気の弱さをこれでもかと表している彼は、先ほどの会話からブチャラティの妨害を担当することになったアルゲーロである。

『わ、わかったよ。で、オレはどうしたらいいんだい……？』

『ブチャラティが任されてんのはこの辺の賭場だって聞いたぜ。お前の能力を使えば、その大事な大事な収益をちょろまかしてやるくらいわけねぇよなァ。しかも今日は月

初めだから、ちょうど先月分の利益がまとまったところで……やっぱりツイてるぜ、オレ達はよォ』

『う、うんッ！　わかった、オレやるよッ！』

男達はそこで二手に分かれることにしたようだった。今〝再生〟してない方のマルチェロの行動に至っては、先ほど直に目にした通りなので確認するまでもないだろう。

アバッキオは市街地のほうへ向かい始めた〝アルゲーロ〟の背中を追いつつ、長いコートの陰に隠れたポケットから仕事用の携帯を取り出した。

「ブチャラティ、」

「どうした？　お前がかけてくるなんて珍しいな」

組織からの連絡手段は、ほとんど一方的にパソコンを通じて行われる。そのためリストランテ二階の事務所の電話にかけてくるのは、基本的に任務に向かっている仲間しかいない。しかも先ほど同じように電話をかけてきたフーゴとミスタはもう戻ってきており、新人二人にはまだ仕事用の携帯を持たせていなかったので、かけてくる相手はおのずと限られていた。

「まさかとは思うが、お前までスタンド使いが出たとか言うんじゃあないだろうな？」

「なッ！　なんであんたが知ってんだよ、まさかもう襲われたのかッ!?」

「オレではなくフーゴとミスタがな。怪我はない。お前達が出た後、二人にはカジノの集金に行ってもらったんだ」
「あぁ、それでか……」
怪我人なし、と聞いてアバッキオは少し落ち着きを取り戻したようだった。「それで、とは?」電話の向こうのアバッキオこそ交戦したのだろうか。彼のスタンド能力は戦闘向きではないが、向こうにはジョルノもベルもいるはずだ。
こうして電話をかけてくるぐらいなのだから全員無事なのだろうが……。
「敵は二人組、狙いはジョルノとあんただ」
「ジョルノも……?」
「〝涙目のルカ〟の報復らしい。こっちは〝人を不運にする〟とかいう妙なスタンドを使う野郎で、ジョルノとベルが追ってる。オレはもう一人のほうをムーディ・ブルースで追跡してる。ヴィンチェンツォ通りを道なりだ」
「なるほど……」
〝涙目のルカ〟の名を聞いて、つくづく因果だな、とブチャラティは他人事のように思った。ジョルノとブチャラティの出会いはルカの死を起点にしている。そしてブチャラティはジョルノの黄金の精神に触れ、犯人は見つからなかったと虚偽の報告をした。これはただちょっと未来ある少年に感じ入って、仕事の手を抜いたとかそういう次

元の話ではない。ジョルノの、ボスを倒すという夢に賭けて彼を仲間に迎え入れたのだから、間違いなく組織に対する裏切りだった。ならばその選択の結果が早くも現れたというだけのこと。

「フーゴ達の報告によれば、そのスタンド使いはタール状の物質で相手の身体の包み、行動を操作する能力らしい。動きが精密で遠隔操作型とまではいかないだろうが、本体が隠れちまってどう見つけたもんかと頭を悩ませてたんだ。お前が追っててくれて助かるよ」

「あぁ、こっちは任せてくれ」

「だが絶対に近づきすぎるな。ナランチャを向かわせる。お前の追跡とあいつの索敵があれば、どこに潜んでたってすぐ見つけられるだろう」

身体の自由を奪われる能力というのは厄介だが、逆に言えばその黒いスタンドに近づかなければ問題ないということだ。本体の方もその弱点がわかっているから、身を隠すことに専念しているに違いない。ミスタのピストルズをかわすくらい素早い動きのスタンドらしいが、他の人間を操作している間に本体の方を奇襲すれば倒すことはそう難しくないだろう。ムーディ・ブルースで足跡を辿り、ナランチャのエアロスミスで発見。そのまま本体に向かって機銃をぶち込んでやれば、タールに汚れてやる必要は全くないというわけだ。

あとはもう一人の方か……。そう考えたところで電話の向こうのアバッキオも同じことを思ったのか、あいつらのことなんだが、と口を開いた。
「ジョルノがその〝不運〟の効果をかけられちまってて、少々まずい状況かもしれねぇ。タクシーに横から突っ込まれても相変わらずふてぶてしい面をしてやがったが」
「そうか……二人は今どこに？」
「なるべく巻き添え被害が出ねぇよう、ポッジョレアーレ墓地のほうへ向かうと言ってたぜ」
「空港前だな。わかった、ありがとう。お前も気をつけろよ」
「あぁ」
通話を終えたブチャラティは早速ナランチャにアバッキオのところへ向かうように指示を出す。もちろん自分も一緒だ。流石にレーダーを見ながら車の運転をさせるわけにはいかないし、なにより今回の件はブチャラティの行動が生んだ結果である。部下に任せて高みの見物をするつもりはない。
「よしッ！　ブチャラティ、それじゃあ行こうぜッ！」
一応敵に攻撃を受けているという状況なのだが、ナランチャは仕事をもらえて嬉しそうである。それに少し呆れたような視線を向けたフーゴは、ブチャラティが指示を出すまでもなく先に考えを汲み取ってくれた。

「で、ぼくらはジョルノ達を追ってポッジョレアーレ墓地へ向かえばいいと？」
「流石うちの参謀殿は話が早いな。帰ってきたばかりで悪いが、ミスタも頼めるか？」
「行くのは構わねぇんだけどよォ～、その〝不運〟を操るスタンドってやつ？　周りがアンラッキーってことは本人がラッキーってことだろ？　当たらねーんじゃねぇのか？」
　別に敬虔なカトリックというわけではないものの、ミスタは基本的に〝神〟というものを信じている。そのことは普段、彼のどんな逆境にも耐えうる楽観的な性格に大いに生かされているのだが、今回のように〝運〟を操るといわれるとどうも引っかかるのだろうか。彼のスタンド達もいつになく消極的な主人に驚いたらしく、大きな身振り手振りで口々に喚きたてる。
「ミスター！　オレタチヲ信ジロヨーッ！」
「〝ヨン〟ガ関係ナキャア、ミスタモラッキーダゼーッ！」
「いや、オレは別にブルってるとかそういうんじゃあないぜ。ただ、運ってもんは本当にありやがるからよォ。しかも今日は〝四〟の月の初めの日だ……」
「アアーッ！　ホントウダーッ！」
　しかしこの主人にしてこのスタンドありだ。ご丁寧にＮｏ．４を抜かした彼らが、その数字を嫌うのは同じであった。

「あんたまたそんなこと言って、四月は丸ごと休むつもりですか？」
「だったらなんかいい策でもあんのかよッ、フーゴ」
「そうですね……その男たちは二人組なんですよね？　だったら策はあるかもしれません。ブチャラティも行くんでしょう？　少し頼みたいことが」
「ん？　いいぜ」
作戦会議――そういうにはあまりにお粗末だけれど、この天使のような顔をしたＩＱ．１５２の天才はこういうときに役に立つ。ブチャラティ自身も咄嗟の判断力や胆力があるからこそこうしてここまで生き残ってきたが、何事にも臨機応変に対応できるがゆえに多少大雑把なところもあるのだ。
ナランチャも交えて人間四人。この時点でミスタは嫌がるかもしれないが、彼がその事実に気づいていないうちにフーゴの話は進んでいく。
「ウエェーン！　ヤメロヨー！　ヘンナモンツケンナヨー！」
「Ｎｏ．３、〝泥〟ンコ遊ビナンテヤルナヨナーッ！」
「Ｎｏ．１、Ｎｏ．２、オマエラ〝泥〟ナンカツケテカエッテキタンダロー」
「ウゲェェーッ！ホントダ、汚ネーッ！」
「コッチヨルナー！」
「ナンダトー！」

その傍らで小さな弾丸のスタンドたちは、いつものようにくだらないじゃれあいを繰り広げていたのだった。
その身を少しずつ黒いものへと染めながら――。

涙目のメモーリエ

〝涙目のルカ〟――その男にマルチェロとアルゲーロが出会ったのは、彼がまだ〝涙目の〟という二つ名を持つ前の事であり、同様にマルチェロ達もまだスタンド能力を手にしてはいない、正真正銘ただのチンピラであった時分だった。

というのも、今でこそ〈パッショーネ〉はネアポリスを始めとしたイタリア全土、それからヨーロッパやアジアの方にまで影響力をもっているが、その歴史はシチリアのマフィアのように古いわけでもなく、ほんの十数年前にできたばかりの新興組織だ。できた頃には当然、ネアポリスの街は他の勢力が仕切っていたし、縄張りをめぐっての抗争や小競り合いも絶えなかった。

そしてそうしたいわゆる本職の人間たちの争いは街のチンピラにも当然無関係というわけにいかず、さぁ古くから馴染みの深いギャングか、それとも新進気鋭の〈パッショーネ〉のどちらにつくか、となったとき、マルチェロは新しい方に賭けたというわけだ。彼はスタンド能力が発現するまえから、自分の〝直観〟や〝運〟については根拠のない絶対的な自信を持っていた。もし本当に〝運〟がいい人間なら、チンピラなんか

にはならなかっただろうが、それはそれ。〝運〟と〝悪運〟というのは別物として、それなりに三下の人生を楽しく謳歌していた。できたばかりの〈パッショーネ〉にはポルポの入団試験は存在せず、比較的広い門戸が開かれていたのも幸いした。

「しっかしギャングっつってもよォ、仲良くチーム組んでってのは変わんないのなァ」

〈パッショーネ〉に入って初めての仕事は、別段チンピラの時とそう大差がないように思われた。マルチェロの感覚的には、これまでやっていたカツアゲという行為に〝ショバ代の徴収〟と大層な名前がついたくらいの認識である。もちろん、これまでと違って得られた金が丸ごと自分の懐に入るわけではなかったが、個人にしか行えなかったその行為が立ち並ぶ店々を相手にするのだから金の規模が違う。

ギャングになったマルチェロは同じようなチンピラ上がりの人間とチームを組まされ、ネアポリスの北、地元カゼルタで組織のために働くことになった。その時一緒だったのが、他でもないルカとアルゲーロだった。

「仲良く？　だったらお前よォ、いい友情関係を築くためには欠かせないモンがあるだろうが」

ルカは三人の中で、最も年長の男だった。だからというわけではないが、マルチェロは責任を負ったりするのを面倒だと考えるタチであるし、アルゲーロのほうはどうして

こいつがチンピラなんかやってんのかねぇと首を傾げたくなるほど小心な男であったから、必然ルカはチームのリーダーに収まった。

サツに呼び止められてもギリギリ言い訳の効く凶器を常に手にしている彼は、威嚇でもするようにこんこんと石畳をシャベルの先で叩く。

「なんだよ、それ」

「〝三つのU〟だよ、三つの〝U〟。〝嘘をつかない〟、〝恨まない〟、相手を〝敬う〟……な？　お前らの頭でも覚えやすいだろう？」

「ハッ、あんたジジイかよ、説教くせぇな、――ッ!?」

マルチェロがぼやいた途端、ビュン、と風を切る音がして鼻先をシャベルが掠める。

「ヒィィィッ」それに大きな悲鳴を上げて怯えたのは小心者のアルゲーロで、マルチェロとしてはなんだこいつ……と先が思いやられる気分であった。こういう好戦的な輩はチンピラに多いが、楽しいことだけをやっていられればそれいいマルチェロにとってかなり苦手で迷惑なタイプだった。

「口の利き方に気をつけろッ！　テメェ、このオレを舐めてんのかァ？　ああーーッ？」

「……あぁ、悪かったよッ。あんたがリーダーだもんな、アルゲーロのやつがチビっちまうから勘弁してやってくれよ」

「フン、謝る脳みそはあるみたいだな……。いいだろう、これも〝恨まない〟だ。今の発

言は水に流してやる」
　しかし短気そうに見えたルカはマルチェロが謝るとすんなり矛を収めた。それから不意に上着のポケットをごそごそやったかと思うと、綺麗に折り目のついたハンカチを取り出して泣きべそをかいているアルゲーロに向かって差し出す。
「ヒッ、ありがとう……ございます……」
「オレは男が泣くな、なんてしょうもねーことは言わねぇよ。馬鹿にもしねぇ。ただな、お前はもうちっとばかし、大事なときにとっといたほうがいいってモンだぜ」
「は、はいッ」

▪

　マルチェロはもう一度、心の中で〝なんだこいつ……〟と思った。チンピラ、いやもうギャングか。ギャングのくせにあんなお綺麗なハンカチを持って、そりゃあ泣いている相手が可愛いお嬢さんならイタリアーノの血が騒ぐのもわかるが、情けない男相手にあれはない。
　ただ男ということを抜きにしても、こんなところまで落ちてしまったマルチェロやアルゲーロに対してハンカチを差し出してくれるような人間は、後にも先にもルカだけだった。
「相手を〝敬う〟、ねぇ……」

ルカはとにかく自分ルールが多くて、適当な性格のマルチェロからすると面倒なリーダーだった。だがそれでも彼が〝三つのU〟として教えてくれたことは、一つ目の信条である〝嘘をつかない〟という言葉通り、二つ目も三つ目もきちんと守られていた。てっきり、〝友情〟なんて言葉は体のいい搾取かと思っていたものだが、ヘマをしたアルゲーロが対抗組織の奴らにとっ捕まったときも多勢に無勢だろうが率先してカチ込みに行ったのだ、ルカという男は。

それで顔面に後遺症が残るような怪我を負っても〝恨まない〟って、原因となったアルゲーロへのお咎めはなしだし、そのくせ自分は無傷だと言い張ったアルゲーロに、てめぇはこのオレに嘘をつくのかーッ！　舐めてんじゃあねぇーーーッ!!　と激昂して結局全治二か月の大怪我を負わせたりするのだから、ルカはとことんわけのわからない男だった。でも、マルチェロもアルゲーロもそのわけのわからなさが嫌いじゃなかった。

だから二人はこの男の役に立ちたいと思って、当時、死人が相次ぐと噂の昇格試験を受けに行った。もちろん、そんな試験が誰でも自由に受けられるわけじゃあなくて、情報を掴むだけでもどれほど苦労したことか。だが、それでも〝悪運〟のお導きというわけか、マルチェロ達は試験を受ける機会を得た。ライターの火を一日守り通すというだけの、くだらない余興みたいな試験を。

「なんだこのクソみてーな試験はよォ。ったく、上の考えることってのは悪趣味で嫌になるぜ」

その時のポルポはまだ収監されていなかったので、ライターを持ち出す難しさもなかった。死人が出るという話だったから一体何をさせられるのかと身構えていたマルチェロは、実態を知って拍子抜けする。これは真に能力が認められて昇格するのではなく、お偉いさんのちょっとした暇つぶしなんだろうと思った。火を守り通せれば取り立ててもらえて、失敗すれば殺される。人を人とも思わぬ、実にギャングの幹部らしい遊びだ。反吐が出る。

けれどもチャンスはチャンスに代わりないのだからと、マルチェロは彼にしては根気よく二十三時間まで炎を守り切った。最後の一時間、〝悪運〟強いはずのマルチェロの炎を消してしまったのは事もあろうか次に試験を受けるはずだったアルゲーロの盛大なくしゃみだったのだが、それもまたお導き。再点火を見た二人は、晴れてスタンド使いとなって生き残った。

スタンド使いになっても、出た能力によっては組織にさほど重用されないとわかったのだけれども。

「とうとう犯人を見つけたぜッ、今どこだ。そっちはどーよ?」

空港から走り去ったマルチェロは、息せき切って早速仲間へと連絡を入れた。まさか相手もスタンド使いだったとは。道理であの人が殺られるわけだとは思いつつ、自身も慣れない形での戦闘にどうしても浮ついてしまう。

マルチェロの能力、ナイティナイン・プロブレムスは、彼の〝悪運〟をこれ以上ないほど確固たるものにしてくれる能力だった。彼自身は自分の能力を気に入ってはいるが、他者からの評価は正直なところ微妙である。確かに対象を〝不運〟にすることは限りなく相手を死に近づけられるが、暗殺チームに入れるほど攻撃的で確実性のある能力でもない。だからスタンド能力が発現したあとも、特に上に取り立てられるようなことはなかった。ルカの傍を離れたくなかったマルチェロとしては、それもまたある意味ラッキーな話である。

「オレはもうだめだぁ」

「アルゲーロよォ、どうしたんってんだよォ」

そしてアルゲーロのほうはマルチェロに巻き込まれた形で能力が発現したため、組織にスタンド使いであることが知られていない。彼のペイント・イット・ブラックはスタンドで黒く印をつけた相手を操作する能力で、マルチェロなんかより余程使いでのある能力だったけれども、本人の気質がこうだから能力を使って上を目指そうなんて気はさらさらなかった。〈パッショーネ〉が拡大するに従って、三人はいつしかそれぞれ別の場

所を治めるように決められてしまったけれど、陰ながらルカを支えていければそれでいいと思って、ルカに試験を受けるのも勧めなかったくらいだ。その時は死ぬかもしれないから、と遠慮してしまったのだが、今になって受けさせておけばよかったと後悔している。

そうすればあの、金髪のクソ生意気なスタンド使いのガキに殺されるようなこともなかっただろうに……。

「カジノに行ったんだろ？　失敗したのか？」

マルチェロは苦い後悔を飲み下すと、頭を振って仲間との会話に集中することにした。

もうあのひとはいねぇんだから、オレがしっかりしねぇと。

責任を負うのが嫌でルカにリーダーを任せっきりにしていたマルチェロだが、さすがに泣き虫で根性なしのアルゲーロの面倒は自分がみてやらなくてはと思っている。

「カ、カジノには行ったんだよう！　そこの経理係もうまく操って、外まで金も持ち出せたッ。で、でもその時ちょうどブチャラティんとこの奴がやってきてッ」

「おおっ、そいつはラッキーじゃあねぇか」

「なにがラッキーなもんか！　ガンマンがいたんだけど、スタンド使いだったんだッ！　スタンド使いってことは、オレにダメージを与えられるってことだろう？　怖ええよ

う……」

スタンド使いとの戦闘――。それはマルチェロにとっても経験がなく恐ろしいことだ。しかし生まれつき楽観的な男は、それでもなんとかなるだろう、とすぐに不安を打ち消した。なぜなら既にルカを殺った犯人は見つかっていて、ナイティナイン・プロブレムスは発動している。カジノの方の失敗は誤算だが、別に金はついでぐらいの気分だった。

「なぁにビビッてやがる、まぁいい。先に本命を殺っちまおうぜ。既にナイティナイン・プロブレムスは対象を絞った。これから奴はどん底で、反対に今のオレは超ツイてる。お前が怖いってんならオレ一人で殺っちまってもいいが、それじゃあお前もすっきりしないだろう?」

「うん……嫌だ。そいつは今どこ?」

電話の向こうのアルゲーロの声が、半泣きから次第にしっかりしたものに変わる。そうだ、もうハンカチを渡してもらえるのを待ってちゃあいけない。

「感覚的にまだ空港の近くだな……いや、墓地のあたりに向かってんのか? 一般人を巻き込まねぇようにしたのかも」

「なぁ、マルチェロ、オレがそっちに行くまで待っててくれよ? お願いだから先に始めちまわないでくれ」

「あぁあぁ、わかってる。わかってるとも。お前が来るまであのガキは殺さずに待っててやる、そうともオレたちの間に〝嘘はなし〟さ」

言って、マルチェロは自身のスタンドの柔らかな背中を撫でた。正直、一度対象を絞ったこの能力をどうやって制御するのかよくわかっていないが、それでもまぁ、アルゲーロがこちらに来るまでの間くらいはあのガキももつだろう。

なんてったって、マルチェロがそれを望んでいるのだから、神様が微笑まないということはあり得ないのだった。

天高きオルゴーリョ

天高く、真っすぐに伸びる糸杉の林は、ヨーロッパの墓地や教会周辺では実によくある景色である。〝お墓の木〟とも呼ばれるそれは人々にとって死や喪の象徴であり、一説ではあのキリストが磔にされた十字架は糸杉の木によって作られたとか。

そういう、信仰に関連すること以外でも腐敗しにくい糸杉は建築材や彫刻に幅広く利用され、ここイタリアではこの木を利用した寄木細工が有名でもある。あの画家のヴィンセント・ヴァン・ゴッホも好んで絵画の題材に使ったというのだから、ヨーロッパにおける糸杉の身近さは言うまでもないことだった。

▪

「で、いつまでこうしてるつもり?」

▪

しかしいくら糸杉が慣れ親しんだ植物であり、それらが真っすぐに伸びるとしても、密集したそれらに囲まれると閉塞感がこみ上げる。加えてもう日も落ちかけてきているから、長い影に入ってしまうと遠目にはベル達がどこにいるのかまったくわからない

だろう。なるべく人から離れて身を隠す、という意味では申し分ない場所だったが、目的は隠れることではない。ベルとしては完全に夜になって敵を探しにくくなる前にカタをつけたかったのだが、堂々と木の根元に腰を下ろしたジョルノはすっかりくつろいだ風であった。

▪

「まあそう焦らないで。あなたも腰を下ろしたらどうです?」

「あなたも私も近距離型でしょう。まずは敵の本体を見つけるだけでも悩ましいのに、こんなのんびりしていていいわけ?　いつまたどんな〝不運〟がくるかわかったもんじゃあないのに」

空港の正面にある、このポッジョレアーレ墓地の公園に来るだけでも一体何度事故に巻き込まれそうになったことか。普通の人間ならばきっと生きた心地がしないだろうに、ジョルノは嫌味なくらい落ち着いている。ブチャラティにもそういう度胸の据わったところがあるが、確かにジョルノはその彼が期待するだけの大物だわ……と密かに認めざるを得なかった。

▪

「あの男の動機は恨みですからね。だったらぼくの苦しむところをみたいはずだ。たとえ遠隔タイプでも、待っていれば向こうから絶対にやって来る。空港ではこちらが散々

お待たせしたようですし、少しくらいこっちも待ってあげてもいいと思ったんですよ」
「それにしたって、こんな無防備な……そうね、あなたの能力で植物のシェルターでも作ればよかったじゃない」
　彼の能力には攻撃を跳ね返す力があるのだから、待ち構えるとしてももうちょっとやりようがあると思う。
　と言いつつ、ベルも自分ばかりが気を張っているのがだんだん馬鹿らしくなってきて、ジョルノに勧められるまま、彼の隣に腰を下ろした。
「敵の〝不運〟には制限があると思いませんか？」
「制限？　それって範囲ってこと？　確か、〝不運〟になり始めたのは敵の一キロ圏内に入った辺りだったわね」
「ええ。それもそうですが、思い出してください。最初の〝不運〟だって、いきなり車に爆発物が仕掛けられているわけじゃあなく、タイヤのバーストだった。自転車のブレーキの効きが悪くなるのも、そうありえないことじゃあない。観光客の多い通りではジェラートを持った人間がうろうろしているのも普通だし、火事が起こったのは宝石店ではなくキッチンのあるリストランテだ。空港で不審物の誤発見が起こるのも、本物のテロリストが来るよりは確率が高い。ぼくにターゲットが絞られた後もそうです。突っ込んできたのは空港によくあるタクシーで、十トントラックやましてや隕石なんてもので

もない」
「つまり……ギリギリあり得る程度の〝不運〟ってことかしら……？」
ベルが答えにたどり着くと、ジョルノはゆっくりと頷いた。しかし、いくらありえる程度だからと言っても、本当にありえてしまっては危険なものも多い。「では、今の場合だとどんな〝不運〟がありえると思います？」思わず辺りを見回すが、人はいない。ここは墓地の中の公園の外れで、車で乗り入れるのも難しい。隕石が降ってこないのなら土葬の死者が蘇って襲ってくることもないだろうし、あとあるとすれば……。
「この木が燃えるとか、倒れるとか」

▪

ベルは糸杉の幹に背中を持たれかけさせつつ、頭上を仰いだ。幸いにも見上げた空には雨雲の陰りは見られない。
「そうですね。特にイタリアじゃあ煙草のポイ捨てなんてそう珍しくありませんから。墓参りに来た誰かが公園で休憩してその吸い殻から、ね。自然発火や落雷による火災よりは十分あり得る。植物のシェルターなんか作って引きこもったら、蒸し焼きにされてしまいますよ」
「シェルターじゃなくっても、今この状況で火災は困るわよ」
「ですから、もし火が出たらあなたが燃え始めの草木を砂糖に変えてください。砂糖は

焦げたり溶けたりはするけれど、燃焼性が低いし空気中の酸素程度では単独で燃え続けたりしないから」

「もーッ！　じゃあこんなぼさっと座ってないで、今のうちに煙草の吸殻集めておきゃあいいじゃないのッ！」

「どうせ燃えるときは〝見落とし〟があるものです。それに〝不運〟が始まったら敵が近くに来た証拠じゃあないですか」

ぴしゃり、と涼しい顔で反論され、ベルはぐぬぬ、と唸ることしかできない。こんなギャングに入りたての、年下の少年にここまで言い負かされるなんて。

別にこの場合は勝ち負けも何もないのだが、ベルはついムキになって身を乗り出した。「ねえ、聞きたいんだけど」どうせポルポの件に関して尋問はするつもりだったのである。二人きりの今は都合がいいし、もしも黒ならここで始末してしまってもいい。

始末――そう、そもそもベルはジョルノを消すつもりでブチャラティチームへとやってきたのだ。まだ接触して初日であることと、予想外に年若い少年だったためについ様子見をしていたが、今ならジョルノを消してしまっても引き続きブチャラティの調査に当たることができる。

じゃれるふりをして彼の肩を突き、体重をかけて押し倒したベルは、そのままジョルノの両手首を掴んで捻り上げた。この世界にいて長いのだから、これでも一通りの体術

くらいは身についている。
「……随分と積極的なひとですね」
「吸い殻での火災より、年上のお姉さんに襲われるっていう〝不運〟のほうが確率が高かっただけじゃない？」
「それで、聞きたいこととはなんでしょう？」
　見下ろしたジョルノの表情は、相変わらず涼し気だった。この状況に動揺することも、年頃の少年らしく高揚することもない。ろくな抵抗もなくされるがままで、それがベルの癪に障った。アバッキオがこの少年に大人げなくイラついてしまうのもなんだか少しわかる気がする。
「あなたがルカを殺したのって、さっき蔦を砂糖に変えようとした私みたいに自滅だったってこと？」
「……今、その確認をするのは無駄じゃあないですか？　自滅だとしても敵が矛を収めてくれるとは思えませんし」
「敵はそうでしょうね。でもあなた、私がポルポのとこから来たってわかってる？　だったらこの〝殺意の確認〟は無駄じゃあないと思うけど」
「……」
「質問を変えましょうか、ジョルノ・ジョバァーナ？　バナナって植物？」

そこまで言ってようやく、ジョルノの片眉がぴくりと動いた。
やはり、わざとだったのか。いや、わざとじゃなく拳銃をバナナに変えるなどあり得ないのだが、それでもベルは小さく息を呑む。それはこんな少年が暗殺を、という事実の他に、下から見上げてくる彼が穏やかに微笑んでいたからかもしれない。恐ろしいことに通常、浮かぶはずの罪悪感や失態を恥じる色が、彼の表情には全くなかったのである！
「……もし、故意だとしたらあなたはぼくを殺しますか？」
「ええ。でも、その前に理由が知りたいわ」
「ぼくはあの男が言ってた通りにしただけのことですよ。〝侮辱する〟という行為に対しては、殺人も許されるんだって」
それは確かにポルポがよく言う言葉だった。では、この少年は何かポルポに侮辱されるようなことがあってその報復に暗殺しようとしたというのだろうか。スタンド能力を身に着けてすぐに？　なんて末恐ろしい……。
体勢は相変わらずベルが上だったが、いつの間にか圧倒されてしまっているのを感じる。ううっ、と米神に汗が伝った。
「……じゃあ、私がその報復でさらにあなたを殺しても許されるってわけね？」
「やれるものならどうぞ」

「はあっ!?」
「あなたがぼくの両手を砂糖に変えてしまったら、ぼくはもうスタンドを使えない。この状況で殺すのはそう難しくないと思いますが」
　挑発か。いや、そうではない。彼はベルの能力をわかっているのだし、こんな状況で挑発する意味がない。第一、ジョルノの瞳には嘲りの色はなかった。ただ底知れぬ覚悟の光だけが、薄暗くなってきた視界の中で爛々と輝いている。
「頭おかしいんじゃあないの、殺すって言ってんのよッ!?」
「だからどうぞと言っています。何度も言わせないでください、ぼくは無駄が嫌いなんだ」
「ッ……!」
　殺れる、確実に。別に人を殺すのだって初めてじゃあない。こいつは生かしておくと危険だ。チンピラ崩れでやむなくこちらに足を踏み入れたのではなく、もっと何か大きな野望を持った――そう、この男は組織の為にならない、理屈抜きにそんな気がする。
「トゥッティ・フルッティッ!」
　だが、ベルが能力を発動したとき、その手はジョルノの手首からは離れていた。対象は二メートル先の、木蔦の下生え。細長く白い煙が立ち上り始めていたそこから、先ほどひと際大きな火の手が上がったばかりだったのである。

「敵さんのおでましよ」

ベルは精一杯虚勢を張ってそう言うと、ジョルノの上から退いた。自分が精神的に彼に押し負けてしまったことは明白だ。それはもはやスタンドバトル以前の問題である。動揺したまま、ひとまず周囲に視線を走らせあのウサギ男の姿を探すが見当たらない。

不意に目の前を、黒い物体がいくつも降り注いだ。

「ッーー!?　鳥、ですって!?」

ぼとぼとと狙いをすましたかのように墜落してくるのは、濡れ羽色と呼ぶのが相応しいほど真っ黒な鳥たちだった。だがそれらはカラスではなく、大きく発達した胸骨の形から元々は鳩なのだろう。黒く染められた鳩たちは地に落ちた後も羽をばたつかせ、その身を染める染料を二人の足元にまき散らしていく。

「これがあり得るレベルの〝不運〟だって言うのッ!?」

「いいえ。これは……敵は二人いるようですね……」

付着した黒い染料はコールタールのようにどろりとしていた。それだけでなく、まるで意思を持った生き物のようにじわじわと身体を這いあがってくる。逃げようと思っても足が自由に動かせなかった。ジョルノも同様、両足の足首から下は完全に黒く染め上げられている。

「よぉよぉよぉ、クソ生意気なガキよォ〜。まだ無事に生きてっかぁ〜ッ?」

　ウサギの男が現れたのは、二人が膝から下の自由を失った頃合いであった。
「そういやぁ、自己紹介がまだだったなァ～。　オレの名はマルチェロで、あんた達の足を捕まえてるもう一人の仲間はアルゲーロってんだ。二人ともょうくルカさんには世話になったんだ……まぁ、奴はシャイなもんでよ、顔出しは勘弁してやってくれな？」
　男はゆっくりとこちらに近づいてくるものの、決して十メートル以内には入ってこようとしない。ベルの能力はまだ見られていないはずだが、空港で反撃しなかったことからして近距離型だと見抜かれているのだろう。お互いあからさまな様子見だったが、やはり動けないという点で不利なのはこちらだった。
「……オイ、ガキッ!!　こっちが名乗ったんだから、そっちも名乗るのが礼儀ってモンじゃあねぇのかーーッ？　ああーーッ？」
「ジョルノ・ジョバァーナだ」
「そうかい、ジョルノ君ね、ジョルノ君……。そうだなァ。ジョルノ君はどういう死に方が望みだ？　ルカさんは頭にスコップ叩きこまれてたみたいだけどよォ～、はぁ～ッ、痛かっただろうなァ～ッ？」
　男は妙な猫撫で声を出したり、かと思うと急に大声を上げて怒鳴りつけたり、じわじわとジョルノをいたぶっているつもりのようだが、ちらりと横目で盗み見た彼の顔は至って真顔である。むしろ男の方が次第に苛立ちを隠せなくなってきており、先ほどの

自分もこんな感じであったのかと、ベルは内心物凄く落ち込んだ。
「あの人はよう、ほんとにほんとに優しい人だったんだ……お前みたいなやつに殺されちまうなんて絶対あっちゃあいけねぇんだ」
「……」
「このクソガキーーッ!!　聞いてんのかコラッ!!　何黙ってやがるッ!」
「……優しい人が子供に麻薬を売りつけますか?」
ジョルノの静かな問いは、糸杉の林に沁み入るようだった。
そりゃあルカが薬を扱っていた噂を確かめるにはこの男に聞くのが確実だろうが、今この状況で質問できる精神がどうかしている。男も流石に虚を突かれたようで、はぁ?と一瞬、間抜けな顔を晒した。
「……テメェ、何か勘違いしてねぇか?　オレ達はギャングなんだぜ?　おい、アルゲーロ、こいつにわからせてやれッ!」
マルチェロがそう声を張りあげると、ベルの身体が勝手に動き始める。そしてそのまま鋭く尖ったヒールの先で、ジョルノの足の甲を思い切り踏み抜いた。「ッ……!」これは流石に痛かったようで、ジョルノの顔が初めて苦痛に歪む。しかしそれでも、瞳はまだ恐ろしいまでの落ち着きをたたえていた。
「なるほど……このタールのようなスタンドで人を使って薬を運ばせ、あなたの〝幸運

〝で取引現場は絶対に見つかることはない。そういうことですか？」
「だったらなんだってんだよッ！」
「なんでもありませんよ、ただ、それはぼくの目指すギャングとは違う……」
「なにワケのわかんねーこと言ってやがるッ！　アルゲーロ、やれッ！」
　マルチェロの号令にベルはハッとしたが、依然として身体の自由は奪われている。今やタールは腰元まで侵食してきており、容赦のない蹴りがジョルノの胴に叩きこまれた。
「ぐッ」
「ジョルノッ！」
　一体どうすればいい。上半身はかろうじて自由だが、マルチェロはスタンドの射程距離の外だし、ジョルノを砂糖に変えたところでどうしようもない。繰り返される猛蹴にとうとう膝をついたジョルノは地面に倒れ伏し、ベルはというと彼を殺しに来たはずなのに焦っていた。
「ハハハハハッ、情けねぇなァーーッ！　今ので肋骨、何本いった？　女の蹴りで骨を折るなんてよォ、情けなくって涙が出るぜーッ！　でもな、打ち所が悪けりゃそういうこともあるさ、今のお前はとびきり運が悪いんだから仕方ねぇよ……な？」
　そして地べたに這いつくばったジョルノの頭に、ゆっくりとベルの踵が乗せられる。

「女のヒールってのはよう、お洒落だかなんだか知らねーが、なんでこんな危ねぇんだろうなァ？　なぁジョルノ、今その女が思いっ切り踏んだらよォ、ヒールが脳天までぶっ刺さっちまうんじゃあねぇかァ？」

その言葉に顔色をなくしたのは、ジョルノではなくベルの方だ。これはやむを得ない。まだ自由に動く手を身体にそわせるようにしてそっと下ろし、自らの右足を消す覚悟を決める。いくら砂糖から再び戻せると言っても、この後の勝ち筋が見えない以上はやりたくなかった。それに砂糖なら何でもよいというわけではなく、変化させた分の砂糖が散ってしまえばもう元には戻せない。

それでも――。

「使わなくていいんですッ、ベル！　ぼくはこの位置がいいッ！」

「えっ!?」

見れば倒れたときについたジョルノの拳が、地面を割っている。

ぼこりぼこりと地下を脈打つそれはまっすぐにマルチェロの元へ向かい、彼の顎目掛けて勢いよく息吹いた――。

銃声とフェリチータ

足の裏が奇妙な振動を捉えた瞬間、響き渡る三発の銃声。

マルチェロは自分が何にどこから攻撃されたのかはちっともわからなかったが、同時にそれらが全て自分に当たらないことを確信していた。仮にここで目を瞑ったとしても、優雅にお茶の時間を過ごしたとしても結果は同じだろう。

はたして彼の顎を強かに打つはずだった糸杉の若木は、通常ではありえない弾道を描いて飛来した鉛玉によって木っ端みじんに砕け散る。

「な、なにィィーーッ!?」

今、マルチェロは憎きジョルノと十メートルほどの距離を開けて正対している。別の男の困惑する声が聞こえたのはマルチェロの真後ろで、普通ならばマルチェロの正面に伸びた糸杉に当たることはない。

だが、マルチェロのスタンドがあればこの結果はギリギリあり得てしまうのだ。なぜならブチャラティチームのガンマンが扱う銃は自由な軌道を描くことができる。そして彼のスタンドは既にペイント・イット・ブラックに汚染されている。この二点の事実

をマルチェロはつゆほども知らないが、それでも起こることは起こるし、彼はなぜ自分が助かったかなど考えない。

運がいい、その事実の前ではいかなる理屈も計算も机上の空論だからだ。

「ミ、ミスタッ！」

ジョルノと女の視線は、マルチェロの後方にくぎ付けになる。ゆっくりともったいつけるように振り返ってやれば、ミスタと呼ばれたガンマンは左肩に二つ、右わき腹に一つ風穴を開けていた。

「……オイオイ、一体どうなってやがんだよォ、これもテメェのラッキーだって言うのか？　当たらねぇならともかくも、オレが撃った弾がオレに当たるなんておかしいだろ……ッ？」

ただの強がりではなく、流血しながらも不敵に笑うミスタからはどこか自身と似たものを感じる。きっとこの状況でも絶対になんとかなると思っているのだ。実際、この男も大概運がよく、弾は全て急所を外れている。

「ス、スマネーッ！　カラダガ勝手ニッ……！」

「デ、デモ、当タッタノハ木ダゾッ!?」

「ミスターッ、ミスタハ自由ニ動ケルカ―ッ？」

「馬鹿野郎ッ、おめーら、汚れたんだったら早く言えよッ！」

ミスタは自分のスタンド達を一喝すると、無事な利き手で懲りずに銃を構えたままじわじわと近づいてくる。スタンドが汚染済みならこの男の自由も奪えそうなものだが、ばらばらの動きをする群体型だから一体一体を動かすだけでアルゲーロ的に定員オーバーなのかもしれない。確固たる意思を持ち、それぞれ別々のことを話すスタンドをマルチェロは初めて見た。

――この男のスタンドは銃……？　いや、弾だけか？

二インチ程度の短身銃（スナブノーズ）の射程距離はおおよそ二十メートルほど。弾は六発。

この距離と遮蔽の物の少なさなら、わざわざスタンドを使わなくても普通の拳銃で十分だと判断しての接近か。

だがいくら鈍く光る銃口がこちらを向いていても、マルチェロは少しも恐怖を感じなかった。

「しっかし、攻撃を跳ね返したのはオレでも、そのちびっこいスタンド達でもねぇぜ？　感謝しなくちゃあなァ～～？　どんな気分だ、ジョルノ？　テメェのせいでお友達が傷つくってぇのはよォ？」

「……」

「お前のスタンドなんだろ？　上半身は自由なんだからよ、もっと使ってくれて構わないんだぜ？」

声をかけてやっても相変わらず憎らしいほど生意気な目をしているが、流石に仲間が自分のせいで負傷したのは心苦しいらしい。いい気味だ。

やはり、友情というものは誰にとっても大事なもの。それを踏みにじるのも、踏みにじられるのも苦しいだろう。初めて歪んだジョルノの表情を見て、とあることを思いついたマルチェロはにやりと笑う。

「なぁおい、ミスタだっけか？　アンタのそれ、改造してるがコルト・ディテクティブスペシャルだろ？　やっぱ男ならリボルバーに限るよなァ～～。オレもよォ、短身銃（スナブノーズ）でもきっちり当てられる腕がありゃあ良かったんだが、すっかり鑑賞用になっちまってるんだよ～」

そう言ってマルチェロも懐から自身の銃――コルト・コブラを取り出す。一応弾は装填されているが観賞用だと告白した通り、実際に撃った経験は数えるほどしかなかった。というのも、〝幸運〟を駆使すれば下手くそでも問題なさそうなのだが、そこは〝運〟の要素があるからターゲットに必中必殺とは限らない。絶体絶命のピンチ、相手を殺すつもりで撃った弾が外れてスプリンクラーに大当たり……逃走の機会を得られる、というのも十分に幸運であるからだ。マルチェロのナイティナイン・プロブレムズはそのウサギの足の数が示す通り、〝お守り〟としての側面が大きい。偶然攻撃が敵に当たる、と偶然攻撃が避けられる、では断然後者の方が確率的に起こりやすかった。

しかし、今の状況ならどうだろうか。ミスタのスタンドは事実上こちらの手中にあり、射撃の精度は保証されている。対してミスタがいくら凄腕だろうが、彼の放つ弾は幸運なマルチェロには当たらない。向こうもそれがわかっているから、銃口をこちらに向けたまま次弾を発射しないのだろう。マルチェロが銃を出したことにより、ミスタから発せられる殺気は格段に強いものへと変わったが。

「まぁまぁ安心しろって、オレは撃たねぇよ。ちょっとした余興に使うだけさ。おい、そこの女ッ！　お前これ貸してやるから、撃ってみろよ」

だが構えるかと思わせて、無造作にぽいっと投げられたそれ。

目を瞠った女が視線で問いかけるのに対し、マルチェロは遠目に見てもよくわかるように頷いた。拾わせるにもアルゲーロが動かさなければ女の足はジョルノの頭にのせられたままだからだ。

「お前らさっき、いい雰囲気だったろ？　外でおっ始めようとするアンタらにこっちも焦っちまったくらいなんだからよォ～～」

「ち、違ッ！　あれは――」

「いいから拾えよ、敵に銃を貸してもらえるなんて、お前ありえねぇくらいラッキーだぞ。わかってんのか？」

そこまで言うと意を汲んだアルゲーロにより、女は銃の元にたどり着く。当然彼女は

一度こちらに向かって銃口を向けたが、それがいかに無意味な行動かはよくわかっているだろう。

撃って当たるなら、ミスタがさっさとやっている。

「さてジョルノ、これからあの女にお前を撃たせるわけだが……お前の能力、跳ね返せるんだよなァーーッ？　使ってもいいんだぜ？　誰しも自分の身が大事だもんなァーーッ？」

マルチェロとしてはどちらに転ぼうともまったく問題はなかった。素直にジョルノが撃たれてもいいし、ジョルノが女を裏切ってもいい。まぁここでジョルノが永らえたとしても所詮は一時的なものでしかないのだが、仲間内で殺し合いをさせることが肝心なのだ。これはれっきとした復讐なのだから、単にジョルノを殺して終わりというのではいくらなんでも味気なさすぎるだろう。

「さぁ、撃てよ。まだ腕は自由だろ？　お前の手でジョルノを撃つんだ」

「……」

「撃たねぇってんなら、今度こそヒールで脳天貫かせるぜ？　銃であっさり死なせてやるほうがまだ優しいってモンだろッ？　ええッ？」

それはおそらく殺す側にとってもそうだろう。生で殺しの感触を味わうより、引き金を引くだけのほうが手軽で心理的負担が少ない。文明は効率的かつ残酷に発展してい

るのだから当然だ。
「さぁ、やれよッ！」
怒声に背中を押されるようにして、女は観念したように銃を握りなおす。
「おいッ！　ベルッ、やめろッ！　どうせなら時間稼げ――」
その瞬間、パンッ、と勢いよく放たれた銃弾は、ジョルノではなくマルチェロの後方に飛んでいく。決して運良く外れたわけじゃない。女は明らかにミスタを狙ったのだ。
「は……？」
思わず間抜けな声が漏れてしまうが、振り返って見たミスタもまさか自分が撃たれるとは思わなかったらしく黒い瞳を丸くしている。だが、女の射撃の腕もイマイチなようで、ミスタには当たらなかったみたいだった。
「時間稼げって言うならあと五発。あなたの方に撃ってもいいかしら？」
「……あぁいいぜ、当てられるモンならな。あと四発だったら断るところだが……五発だったらオレに向かって撃つのを許可するぜ」
「て、てめえら、何勝手なこと言ってやがるッ！」
ナイティナイン・プロブレムズは今、ジョルノ一人に〝不運〟のターゲットを絞っている。だからミスタに弾が当たるかどうかは純粋に女の腕次第で、そこに気づいたことは褒めてやってもいい。だがこちらにはもう一人、スタンド使いの相棒がいるのだ。

「忘れてんじゃあねぇだろうなッ!?　さっきは不意のことだったが、次はそうもいかねぇ。てめえがミスタに向かって弾を無駄遣いしようが、こっちは弾道を操ってジョルノに当てることもできるんだぞッ！」
「……やっぱり、今のあなたの幸運ってこの場に弾道が操れる仲間がいることで、どこへ向けて撃っても望みのところへ必中するってわけじゃあないのね。そんな他人任せでルカの仇を討った気になれるんだから、随分とおめでたいじゃない」
「あぁッ?　喧嘩売ってんのか?」
「別に」
　生意気にも鼻で笑った女はおもむろにシリンダーを開くと、手のひらの上にばらばらと残りの弾を出して見せる。ただそれだけなのに女が得意げにしているのが、かえって滑稽で笑えるほどだ。
「ハッ、何をするかと思ったら。弾を撃たずに捨てれば操れないとでも?　さっきも言ったろ、銃が嫌なら蹴り殺させるだけだ」
「違うわ、一発だけ入れるのよ。リボルバーなんだし、あなたの能力だけでジョルノを殺せるって示してみなさいよ」
　――ロシアンルーレット。
　女は宣言通り弾丸を一つ摘まむと、こちらに良く見えるように装填する。間違いな

い。弾は確実に込められている。トリガーが少し引かれ、自由になったシリンダーの回るチャリリッという音が小気味よい。

　マルチェロはどうして自分がそれを思いつかなかったのかと考えてしまうほど、興奮していた。別の言い方をすれば、頭に血が上って冷静さを欠いていた。

「面白れぇッ！　ただし、こめかみでやれよッ?!　一回だ、一回で絶対にキメてやるッ！

　オレの能力で絶対に殺してやるッ！」

「ベル……てめーがジョルノを殺るっつうならオレも容赦しねぇぞ。お前は外したが、オレならスタンドなしでもここからお前に当てられる」

「おいッ、アルゲーロ！　ミスタに邪魔させるな、全力で拘束しろッ！　ついでにジョルノも首から下全部覆っちまえ、攻撃を跳ね返させるな、オレの〝運〟で確実に仕留めてやるんだッ！」

　こめかみに直接銃口を当てるなら、ミスタのスタンドを細かく操る必要はない。女は自らの意思で引き金を引く。ジョルノの身体も拘束しているだけで別に動かしたいわけじゃあない。臨機応変に対応するため余力を残させていたが、アルゲーロが全力をだせば相手が群体型のスタンド使いでも拘束くらいはできるだろう。

　クソッ！　と焦りを含んだミスタの声が後ろから聞こえてくる。

「ベル……」

「ジョルノ、あなたさっき、私が殺すって言ったときも〝どうぞ〟って言ったわよね？」
かがみこんだ女の銃が、拘束されたジョルノのこめかみを捉える。もう少しくらい怯えた表情を見たかったが、まぁいい。ジョルノを殺すのが自分のスタンド能力だと思うと、マルチェロは嬉しくてたまらなかった。
「ええ。もう一度言ったほうがいいですか？」
「……結構よ。〝無駄〟だもの」
引き金が引かれる――ナイティナイン・プロブレムズがたった六分の一を外すなどありえないッ！
期待した通り紛うことなき銃声が、いや、掃射音が響き渡った。
「ぎゃあああああッ!!」
「なッ!?　なんだ、何が起こったッ!?」
女は確かに引き金を引いた。だが音がしたのは目の前のリボルバーからではない。だったら銃声はどこから？　悲鳴は？
答えはマルチェロの視界の中にある。ジョルノの身体を覆っていたタールが、すうっと消えていく。死んだジョルノの身体ごと消えるのではなく、タールだけが消えていく。

「まさか、まさかァーーッ!!」
マルチェロの絶叫は、糸杉の林の中に木霊した。
呆然としている間に、カチャリと後頭部に固いものが当てられる。ミスタの低い声がすぐ近くで鼓膜を震わせたが、マルチェロの頭の中は大事な相棒のことでいっぱいだった。
「ったく、あいつら遅ぇよ……。にしても、奇跡的なタイミングだな。一瞬、マジでベルが撃ったのかと思ったぜ」
「……私もよ。ミスタが時間稼ぎしろって言うから何か策があるのかと思って……そのついでに〝幸運男〟の鼻っ柱を折ってやろうと思っただけなのに」
マルチェロがうつろな目で何度見つめようとも、ジョルノの頭に穴は開いていなかった。それどころかゆっくりと立ち上がり、服についた土を悠々と払っている。馬鹿な。ありえない。どうしてアルゲーロがやられて、自分は今銃を突きつけられているのだろう。そんなはずは……ナイティナイン・プロブレムズは絶対に幸運をもたらしてくれるんじゃあなかったのか?
「それで、だ。ひとつ聞きてぇんだが、てめぇのラッキーはこの状態でも通用すんのか?
オレの弾はあと三発。三回とも不発な可能性はかなり低いと思うが」
「……」

「どうしたよ、ありえるはずのないことが起こって、自分がラッキーだとは思えなくなっちまったか？　でもよォ～自分で自分はラッキーな人間だと思っていなくちゃあ、ラッキーってのは舞い込んでこないと思うぜ」

まったくもって、その通りだ。マルチェロは今、かつてないほど打ちのめされている。スタンドパワーはすなわち精神力であり、特にマルチェロのそれは強く心持ちに依存していた。

が、ここで完全に心が折れてしまうほど、復讐心は――ルカへの想いは弱いものではない。

もしアルゲーロがやられたのだとしたら、尚更自分が仇を討ってやらねばどうすると、それだけがぐるぐると胸の内をのたくった。

「……やってみろよ、オレは〝幸運〟なんだ。タネはわからねぇが、その女も能力者だったってだけだろッ！　三発だろうと全部不発を引いてやるッ！」

マルチェロのスタンドはそれ自体に攻撃力はない。本人もそれがわかっているから、普段はヒットアンドアウェイの戦法を取っていたし、ここで彼が選択すべきは腹を括ることではなく、ナイティナイン・プロブレムズを最大限利用してこの場を〝逃げきる〟ことだった。彼の能力は射程が長いのだから、この場をしのげばいつかは絶対にジョルノを不慮の事故で仕留めることができただろう。いかなスタンド使いだろうと、どれほ

ど仲間がいようと所詮は人間だ。二十四時間、どんなときも気を張り詰めていられるわけがない。それなのに、今のマルチェロの頭の中には〝逃亡する〟という選択肢は浮かばなかった。

そう、彼の覚悟は〝仇を討つ〟ための覚悟ではなく、仲間を失った男のただの悲しいヤケクソだったのである。

「待たせたな。ミスタ」

そうこうしているうちに、続々とブチャラティの仲間たちがこの場に集まってくる。マルチェロはもう一人だというのに、ジョルノには、ブチャラティにはたくさんの仲間がいる。それがどうしても許せずに、一層マルチェロの心を頑ななものにした。

「時間稼ぎ、それから〝ダール男〟の傀儡役ご苦労様でした。随分と用心深い男で苦労しましたが、ベルもミスタもいい感じに男の注意を引いてくれたので助かりましたよ」

「オレのエアロスミス、かっこよかったんだぜーッ！　あー、お前らにも見せてやりたかったッ！」

「ちっ、ジョルノの野郎はまだ生きてたらしいな」

「おかげさまで。助かりました」

「……クソガキが」

その時、うわああん、と恥も外聞も捨てた泣き声が響く。感動の再会というわけか。

別に男に泣くなとは言わないが、泣きたいのはマルチェロのほうである。
が、この声には聞き覚えがあった。小心者で、泣き虫で、使い勝手のいいスタンドを持っているくせにいつまでたっても人の後ろをついて歩くのが好きな、放っておけない相棒――。
「ア、アルゲーロッ？　お前まだ、生きてッ……!?」
背後には依然としてミスタが銃を構えている。慌てて視線だけで相棒の姿を探すが、目の前にいるのはブチャラティチームの者ばかりだ。「探し物はこいつか？」ぶん、と投げられたそれをマルチェロは咄嗟に受け止める。ちょうどボーリング玉のようなサイズと重みのそれは、妙なチャックで切断されたアルゲーロの生首だった。
「ッ！」
「ごめんよごめんよマルチェロォ～！　オレのせいだ、オレが敵に気づかなかったせいでッ……！」
なぜ首だけで生きているのか、喋ることができるのかは不明だが、アルゲーロは顔面をしわくちゃにして泣きじゃくっている。そんな状態の相棒を見てマルチェロの胸に去来したのは、不思議と怒りではなく泣きたくなるような安堵だった。何一つ事態は好転していないのに、ただアルゲーロがこうして目の前にいることで胸がいっぱいになる。

「バカやろう……お前のせいじゃあねぇ。たとえどっちのミスだろうがオレたちはお互いを〝恨んだりはしない〟」
「ううう、そうだよなァ。オレたち友達だもんなァ……だからさ、オレも〝恨まねぇ〟し逃げてくれマルチェロッ……お前だけなら、幸運なお前ならできるはずだッ！」
そこでようやく、〝逃亡〟という選択肢があることをマルチェロは思い出した。確かにナイティナイン・プロブレムズは守備に特化している。この人数相手でも逃げるだけなら不可能ではないかもしれない。ただ、それにはアルゲーロを置いていく必要がある。
「マルチェロ、オレのことはいいッ！　オレはいいから、お前だけでも逃げてくれようッ！」
だが……そうやってアルゲーロを見捨てて自分一人で助かって、その後にジョルノを上手く殺せたとして、その時のマルチェロは〝幸せ〟と言えるのだろうか。復讐の動機は面子のためというより純粋な憎しみだった。マルチェロはただ、ルカとアルゲーロがいればそれでよかったのに、彼らを失って生き延びることが果たして幸運と言えるのだろうか。
「……ミスタ、頼む。オレはジョルノにだけは殺されたくねぇ……」
マルチェロはその答えを自身のスタンドに委ねることにした。ナイティナイン・プロ

ブレムズは必ずマルチェロに幸運をもたらす。それがたとえ一般的ではなかったとしても、マルチェロにとって、最良の幸運を運んでくれるのだ。
「なぁ、アルゲーロ、ルカさんの〝三つのU〟覚えてるか？」
「もちろんだよッ、〝嘘をつかない〟、〝恨まない〟、相手を〝敬う〟だッ！」
「いや……オレ、最後にすごいこと発見しちまったんだ。Uは四つだよ」
後ろで、銃が握りなおされる気配がする。マルチェロは相棒をぎゅっと胸元に抱きかかえるようにして衝撃に備えたが、それでもその口角は不敵に吊り上がっていた。
「オレは友達を〝裏切らない〟ッ！　死ぬときも一緒だッ！」
間髪入れずに響いた二発の銃声が、男達に確かな幸福と安息をもたらした。目にもとまらぬ早撃ちは、おそらくコンマ数秒以下の誤差でほぼ同時にマルチェロとアルゲーロを逝かせたことだろう。
ミスタは倒れ込んだ二人を見下ろして、この男にしては珍しく苦々し気な表情を浮かべた。
「お前、敵だったけど嫌いじゃあなかったぜ。でもな、来世は覚えとけよ。〝四〟ってのは縁起が悪いんだ……」

恩知らずのトゥッティ・フルッティ

プラトリアーナ・ベルナルディーニは母一人子一人の、ネアポリスの貧民街にはごくありふれた家庭に生まれ育った。父親の顔は知らない。母親はベルを生んだ後も様々な男を代わる代わる家に連れ込んでいるような女だったので、もしかすると母自身もベルの父親が誰であるのかはっきりとはわかっていなかったのかもしれない。

だがこの母親はそういう放蕩さを持ちながらも、決してベルにとって酷い母親ではなかった。なんの伝手も技能もない貧しい母子家庭がなんとか食っていくことができたのも、母を愛した男達が援助してくれたおかげだ。もちろんそういう良い男達だけでなく、中には暴力を振るおうとしたりまだ年端のいかないベルに性的な視線を向ける者もいたりしたが、母はそのような男とはさっさと手を切り、絶対にベルが蹂躙されることを良しとしなかったのである。

ベルは自分の母親が好きだった。義務教育とはいえ学校にも通わせてもらったし、ちゃんとした父親がいなくても、時には空腹を抱えて眠る日があっても、十分に幸せな生活だったと言える。このまま何事もなければ、母親の愛を受けて育ったベルはきっと

普通の娘としての人生を歩み、普通の男に恋をして、ごく普通の家庭を持っていたことだろう。

▪

しかしそうした穏やかな未来が壊れてしまったのは、ある時母親が白くさらさらとした粉末を常用し始めたからだった。

▪

母はベルにその粉末を摂取していることを知られると、それが〝砂糖〟であると偽った。お菓子を買うのは勿体ないでしょう。疲れた時には甘いものがきくのよ。そう言って、でもベルには決して与えようとはしなかった。きっと母自身も身体によくないものであるとはわかっていて、それでもやめられなかったのだろう。

やがて経口摂取するだけだったそれが、より強力で即時的な快楽を求めて注射に代わる。静脈に〝砂糖水〟を入れて無事なわけがないのだから、粉末の正体が〝砂糖〟であるはずがなかった。どれほどベルが砂糖であってくれと強く願っても、ただの子供には麻薬を砂糖に変えてしまえる力などなく、どんどん壊れていく母親を救う術もなかったのである。

ところで、麻薬中毒者の最期とはどのようなものか知っているだろうか。

オーバードーズによる意識低下や心臓、脳神経の損傷、呼吸困難。もしくは幻覚や抑うつ症状による自殺というのもあるだろう。だが、ベルの母親はそうやって過剰摂取して死ねるほど、潤沢に麻薬を買えるだけの金を持っていなかった。どんどんと肌や髪の艶を失い、禁断症状に苦しむ女を見て、さすがにこれまで良くしていてくれた男たちも愛想を尽かしてしまっていたのだ。

結局、ベルの母親を殺したのは麻薬そのものではなく、麻薬の売人だった。金がない母はそれでもなんとか薬を手に入れようと売人に追いすがり、そして殺された。

売人のほうも必死だったから、もしかすると事故だったのかもしれない。ただベルは知っていた。その男が元は母親の恋人の一人で、母親を言葉巧みにだまして薬を飲ませた張本人であると。

「ッ、お母さんッ！」

それはベルが十一歳になってしばらくのことだった。既に学校に行っていると偽ってスリや詐欺行為によって家計を支えていた彼女は、自分の家から血相を変えて飛び出していく男を目撃し、そして帰宅してすぐ母親が殺されたことを知ったのだった。

ベルが駆け寄ったときには母親の息はなく、だからこそベルは医者ではなく警察に向かった。母親を殺した犯人はわかっている。麻薬と、それを勧めたあの男さえいなければ、こんな不幸は起こらなかった。自分が盗みという罪を堂々と犯しているにも関わら

ず、ベルは事もあろうか司法の裁きを望んでしまったのだ。警察が、法律が、自分を助けてくれる、守ってくれると。自分の罪は生きるために仕方がなかったけれども、母の死はそうじゃあないからと。

だが、ベルはすぐに自分の考えがいかに都合よく、夢見がちなものであったかを思い知らされる。

「あぁ～確かにねェ、自殺とは違うようだけども……そうだねェ～」

「犯人はわかってるんです！　この辺りをよくうろついてる男で、薬を売ってて、」

「なるほどねェ、参考にさせてもらうよ」

やってきた警官は母親の腕の注射跡を見るなり、すぐにやれやれと言わんばかりの表情になった。捜査自体も酷くおざなりなもので、ベルが犯人を訴えても参考にするというだけでまともに取り合わない。挙句、「君のお母さんも悪かったようだし」と警官が被害者に向けざるべき言葉を堂々と吐いてみせた。

「そ、そんなッ――」

確かに、麻薬に溺れるのは悪いことだろう。スリをしたのも、観光客を騙くらかして金をせしめたのも悪いことだろう。でも元凶は、麻薬の存在とそれを売った男だ。もし〝正義〟の手が本当に善人の元にしか差し伸べられないのだとしたら、どうしてベル達母娘が〝悪〟に落ちる前に救ってくれなかったのか。罪を犯した人間が今更〝正義〟

を求めるのは、あまりに過ぎたる望みだということなのだろうか。

結局、その後いつまでたっても犯人の男が逮捕されることはなかった。それどころかベルは自分で復讐を果たそうと男の後をつけて、男とあの警官が繋がっていたことを知った。警官はこの周辺で誰が薬を売っているかなんてとっくに知っていて、そのうえで賄賂を受け取り看過していたのである。

〝正義〟は施されなかったのではなく、初めから存在しなかったのだ。

その事実に気が付いた時、ベルは改めて復讐を誓った。自分のことを〝正義〟だと言うつもりは決してない。母を失った彼女はそれまでよりも派手に盗みを繰り返し、多くの人間を踏みにじっていたからだ。弱い彼女が復讐のためにかき集められる力など、金くらいしかなかった。男を殺して、あの警官に金を掴ませて笑ってやるのだと、そうすることがこの世界での〝正しいやり方〟なのだと思った。

〝悪〟を倒すのは〝正義〟なんかじゃあない。

〝悪〟を倒すのは〝より強い悪〟なのだ。

そうしてそうやって一年近く雌伏の時を過ごしたあと、ベルはとうとう警察よりも〝強い悪〟である、〝ギャング〟への片道切符を手にした。情熱を意味する〈パッショーネ〉という名の組織は、それまでイタリアに蔓延っていたギャング共と違って義賊的な色合いが強く、民衆からも比較的受け入れられていたのだ。

もちろん、後ほどベルはまたこの〝正義〟が見せかけに過ぎなかったと知る。最初のイメージは街に浸透するための単なる戦略で、〈パッショーネ〉も結局のところ麻薬で収益を上げるようになっていた。

しかしベルがこの組織に対して求めたものは初めから〝正義〟などではない。〝悪〟を倒すための〝より強い力〟。たとえ今はその憎い麻薬を扱う組織に服従するしかなくても、この身を〝悪〟に染めようとも、力が欲しい。

そうしてベルのスタンド――トゥッティ・フルッティは、かつての彼女が望んだように触れたものを〝砂糖〟に変える力を彼女に与えたのだった。

「ブフゥー、ベルか……思っていたより早かったな」

相変わらずポルポの収監されている牢は、罪人を閉じ込めておくためのものとは到底思えぬほど様々な物資に満ち溢れていた。いや、相変わらずというのもおかしな話か。随分と濃い時間を過ごしたせいで前に訪れたのが遠い昔のように思えるが、ベルがここでジョルノの仕込んだ拳銃で死にかけたのはたった二日前のことなのである。

「ええ、まぁ……相手がどこのどいつかわかっていることですし、密輸の方は今、コリオラノに任せていますから。そんなに時間はかけていられませんよ」

「そうかね、で？　奴の動機はなんだって？」

ポルポは億劫そうに冷蔵庫に手を伸ばすと、中からワインを取り出した。起き抜けの一杯は血圧に負担をかけるだろうが、そもそも健康を気にするような男ならここまで醜く肥え太ることはないだろう。

ベルはポルポがこくこくと喉を動かすのを見上げながら、説明の言葉を探していた。

「はい、詳しいことは聞けず終いでしたが〝侮辱されたから〟だと。ポルポさんの口癖を逆手にとって小賢しい言い訳をする、ただの生意気な子供でした。組織に対する積年の恨みというより、力を手にして万能感に浸っていただけのようですね」

強化ガラス越しに報告を上げつつ、ベルはジョルノのことを思い浮かべる。

嫌と言うほど現実ばかり見てきたベルに向かって、〝このジョルノ・ジョバァーナには夢がある〟と真っすぐに告げてきた黄金色の少年のことを。

ベルはあの涙目のルカにまつわる復讐劇のあと、彼に尋ねたのだ。

なぜ〝殺したければどうぞ〟などと馬鹿なことを言ったのか、言えたのか。

二度目のロシアンルーレットの時はまだわかる。あのときはベルが弾丸を〝砂糖〟に変えたから――金属は変換が遅いため、マルチェロに装填を確認させた段階ではまだ弾の形状を維持していたのだ――こめかみに銃口を当てられた段階でさらさらと零れ落ちる粉の感触を悟った彼は、安心して撃てと言うことができただろう。仮にそれに気

づかなかったとしても、ミスタがいる手前、ベルがあからさまにジョルノを殺すようなことはない。そういう確信のもとでなら、あっさりと自分の命を捨てるような発言をしてしまえるのはまだ理解できる。

しかし、一度目はそうではなかった。他に仲間のいない二人きりで、スタンドを使うための両腕を掴まれて、それで何の策もなく強がったり挑発したりするのはあまりにも愚かである。何か勝算があってやったことなのかと問い詰めると、やがて彼は小さく肩を竦めて、足元に生い茂る木蔦の中から数体の蛇を取り出して見せたのだった。

「……なによ、それ」

「あの〝幸運男〟を待つ間に、あの糸杉の林にはいくつか罠を張っていたんです。ただ待っているのも暇でしたし、自分の能力で生み出した生命に〝不運〟が及ばないのは、空港でタクシーに突っ込まれたときにはっきりしましたから。〝不運〟なら蔦に絡まって降ってきたガラスに串刺しとか、一番ありそうでしょう?」

「待って、あなたの能力は植物を生やすことじゃあ……」

「それを言うならベル、あなたも炭素を含むものを砂糖に変えられると嘘をついたじゃあないですか。もっともアバッキオのお茶を処理した時点で、アンモニアの窒素も何とかしたはずだと思いましたけど」

それではあの時、ベルは自分が優位に立っているつもりでいたが、実は危なかったと

いうことだろうか。蛇に詳しいわけでもないベルはその毒が一体どれほどのものなのかはわからない。しかし、急所を狙われれば毒に限らず十分に危険だし、複数の蛇に噛みつかれる自分を想像するとぞっとせずにはいられない。

「でも、別にぼくは自分に隠し玉があるからあなたを煽ったわけじゃあない。このアスプクサリヘビの毒性はヨーロッパでは最強と言われるけれど、その致命率はたったの四パーセントなんです。そうだな……ミスタだったら死ぬかもしれませんが、もともとこの蛇を生み出したのは索敵用で。拘束された後も、ぼくはこっそり〝タールの男〟を探していたんです」

確かに、下草の生い茂る林の中で地を這う蛇に気づくのは難しいし、蛇の方にはピット器官があるので暗がりであってもあまり関係ない。たとえ即効性の毒はなくとも突然蛇に襲われれば〝タール男〟も度肝を抜くだろうし、拘束が解けた可能性は高かった。あの状況下でもジョルノはきちんと手を打っていたのである。

「でも、結局のところは皆に助けられましたね。ぼくは今回の件で改めて〝仲間〟の重要さがわかりましたよ。あの男たちにとっては皮肉かもしれませんが……おっとすみません、質問の答えでしたね」

ジョルノは苦笑すると、手の中の蛇を再び元のように蔦へと戻して見せた。〝植物を生み出す〟のではなく、〝生命〟を与えるスタンド――それはもはや神の領域ではない

だろうか。
秘められた無限の可能性は、目の前の少年が只者ではないと示しているように思われた。
「ベル、ぼくがあなたに〝どうぞ〟と言ったのは、あなたがぼくを殺さないと確信していたからです――」
「――なぜなら、あなたはぼくの〝仲間〟になるからだ」
満を持して告げられた理由は、あまりにも陳腐で下らないものだった。
それなのに、なぜかベルはジョルノの言葉を笑い飛ばすことができなかった。彼を脅し、その命を取ろうとした時に見たものと同じ意志を持った瞳が、ただまっすぐにこちらを射抜いている。
「あなたは〝いい人〟だ……あなたの麻薬に対する姿勢に嘘があるようには思えない。空港ではぼくを突き飛ばしてガラスから守ってもくれた」
「あれはッ！　まだポルポ暗殺の動機を聞いていなかったからよ！」
「突然未知のスタンド使いに襲われたあの状況で、誰がそこまで考えられますか？　咄嗟に出る行動は本心か、元々の性格を反映している……」
「それでも、私は絶対に〝いい人〟なんかじゃあない！」
〝仲間〟になるだって？

そうやって綺麗事に現を抜かせる人間は幸せでいい。自分に向けられた刺客に対し、〝いい人〟だなんて簡単に断じられる人間は気楽でいい。彼の瞳に宿る強さの正体が〝正義〟であると悟り、この世に存在するはずのないそれにベルは激しい怒りと恐怖を感じた。

「〝いい人〟は弱いのよ……〝いい人〟では〝悪〟を倒すことなんてできないのよッ……！」

もしここで彼がベルの発言を否定し、正義は悪を倒すのだなどとのたまおうものなら、今度こそ殺してやると思った。それはベルのこれまでの生き方を全否定するものだからだ。それだけはさせるわけにはいかない。

しかし、ジョルノは夢見がちな少年らしくもなく、鷹揚に頷いて見せた。

「その通りです、ベル。ただ〝いい人〟なだけじゃあ、〝悪〟は倒せない。ぼくはあなたの、いえ――ぼくたちのボスを倒してこの街を乗っ取るつもりでいる」

「何……ですって……？」

「望まない人に麻薬を流すようなギャングを消し去るには、自らギャングにならなくっちゃあいけないってことさ」

思わず息を呑んだベルは、たった今告げられた言葉を脳内でこねくり回し、必死に意味を理解しようとしていた。彼がギャングになろうとした動機はわかる。それはベル

の思想と基本的には一緒だ。

でも、ボスを倒す？　街を乗っ取る？

〈パッショーネ〉のボスの素性は全て秘匿されており、少しでも探ろうとした人間は全員惨たらしい方法でこの世から消されていると聞く。この少年は現実を何もわかっていないのだ、だからそんな夢のような話を口に出せるに違いない。

だが一方で、ベルは自分が誰かにそう言ってほしかったことも痛感していた。自分が不可能だと断じたそれを――夢を見ていいのだと言ってほしかった。〝悪〟を倒すために〝悪〟になることは間違いではないのだと。

「ぼくはそのために〈パッショーネ〉に入団した。ぼくはこの〝組織〟でのし上がって、ゆくゆくは〝ギャング・スター〟になります！

それがぼくの〝夢〟だ！」

他の人間が言えば馬鹿馬鹿しいそれは、ジョルノの口から語られると光り輝く〝黄金の夢〟のように思われた。ギャングなんて薄汚れた生き方が、スターのように輝けるはずないのに――。

「……あなたと私、一体どっちが馬鹿なんでしょうね」

頭では無理だと思うのに、ベルはジョルノから目を離せない。ジョルノなら、どんな無謀な夢でも実現してしまえそうな気がする。

彼にはそう思わせるだけの、何か、言葉にできない〝スゴ味〟があったのだ！

「ふうむ……まぁ、力を持ったガキがすぐ調子に乗るのはよくわかる。今度から新入りにも注意を払うようにしよう。ブチャラティのほうは？」

「……」

「おい、ベル。どうした、聞いているのか？」

「ッ、すみませんッ！　えっと……」

まるで授業中の学生のように自分がすっかり物思いに耽っていたことに気づいたベルは、そこで慌てて背筋をピンと伸ばした。こんな失態、らしくない。やはりまだ迷いがあるせいだろうか。

ベルはなるべく平静を装うと、報告の続きを口にする。ジョルノの金色を思い出した後では、目の前の豪華な牢獄の景色も酷く色褪せたもののように感じた。

「ブチャラティはこの件に関しては何も知らなかったみたいです。元々顔に出にくい男ですが、今回の麻薬の流通制限にも真面目に取り組むつもりで、既にポルポさんに向けての計画書を作成しているくらい……。彼はあなたを殺すどころか、殺されかかったことも知らないかと」

「そうか……。あの男はわたしもそれなりに〝信頼〟していたからね。ふむ、いいだろう」

ポルポはベルの話を聞き終わると、もう全て終わったことのようにあっさりと頷いた。彼は自分が拾い、この五年間何くれとなく面倒を見てやったベルのことを〝信頼〟している。だからベルの判断を信じてブチャラティを白だと決め、そしてジョルノに至っては当然のように始末しているのだと思いきっている。

さらにポルポは今彼が自分で言ったように、ブチャラティのことも〝信頼〟していた。ブチャラティがポルポの隠し財産の場所を知っているというのは〝組織〟内でまことしやかに囁かれる噂であり、それが事実であろうことはブチャラティの能力を知るベルにしてみれば純然たる事実に他ならない。

話題の切れ間に、そっと懐からラッピングされた包みを取り出したベルは、それをガラスの向こうの空間に繋がる唯一の受け渡し口に置いてみせた。

「……なんだ、それは」

「ちょっとした手土産というか……本当は昨日のペッシェ・ドゥ・アプリーレに渡すつもりだったんですけど、来られなくって」

中身は魚の形のチョコレート。いくらパッショーネのバッジとポルポの腹心であるという認識が通っていても、飲食物の持ち込みはしっかり検査をされている。それでも

すぐには手を伸ばさないポルポに対し、ベルは自ら包みを開いて一つ摘まんで見せた。
舌先が苦手な甘みを感じ取り、カカオの香りが鼻を抜ける。本当にこれは何の仕掛けもないただのチョコレート。甘いものは疲れにきくのよ――そう言った母の言葉がふと蘇った。
「甘いものは嫌いと言っていなかったか？」
「……そうですよ。でも、あんなことがあったんだから毒見したほうが安心かなって。そうそう、ジョルノの能力は物体に生命を与える能力でした。だから拳銃をバナナにすることができたんだと……惜しいことをしましたか？」
「いや、いい。能力者などいくらでも作れる」
世間的に見ればすごい〝力〟を持つスタンド能力者でも、〝組織〟にとっては、所詮はその程度だ。だからこそ〝殺す〟しか能のない暗殺チームは、いくらでも代わりがいるとして冷遇されていると聞く。〝悪〟を倒すためとようやく手に入れたベルの能力だって、結局はそんな扱いなのだ。
そう思うと、何の行動も起こしていない言い訳を現実的な大人のふりで誤魔化していたベルは、実はとっくに根腐れしてしまっていたのかもしれない。そしてこのまま自分が倒すべきだと思っていた、惰性的で利己的な〝悪〟となっていたのかもしれない。
あのジョルノ・ジョバァーナに〝夢〟という〝生命〟を与えられるまでは――。

「なッ！　何をするッ！」
　愚かにもチョコレートに手を伸ばしたポルポの指先へ一閃。
　ベルは覚悟を決めると、隠し持っていた剃刀の刃で素早く切りつけた。
「なんのつもりだ、ベルッ！　お前、自分が何をしたかッ……！」
　当然、こんな浅い傷で死ぬはずがない。後で調べられたとしても多少不審に思う程度で、誰もこれが死因だとは思うまい。ポルポも指を押さえて青ざめただけで、それ以外は特に苦しむ様子もみられなかった。
「別に毒は仕込まれていないようだが……おい、本当にこれはなんのつもりだッ！」
　毒なんてものを使ったら、一発で犯人がバレる。ベルは別にジョルノの夢に賭けて、ブチャラティを幹部に押し上げる金を得るために人柱になってやるつもりはないのだ。ただほんの少し、かつて夢想した犯罪を実行してみる勇気が沸いただけ。
　凄むポルポに対して、ベルはどんどんと心が凪いでいくのを感じていた。どうせ答えは返ってこないと知っていながら、それでも無駄な質問が口をついて出る。
「……ポルポさん、涙目のルカが近くの都市の仲間と共謀して麻薬を売っていました。その麻薬がどこから流れてきたのか辿ったら、いつかは国外に行きつきますかね？　それともやっぱり、製造元はうちなんでしょうか？」
「そんなことはどうでもいいッ！　わたしはそれより、お前のこの行動について質問し

ているんだ！　うちが製造してようが、誰が死のうがどうだっていい！　あんなものは馬鹿がやるものだ、馬鹿が何人死のうと、ひったぁころじゃあない！」

ポルポが人を呼ばずに自ら詰問を続けたのは、どう考えても致命傷になりえないほどに傷が浅く、苦しみがまだ彼を襲っていなかったからだろう。〝信頼〟していた部下の蛮行に激昂した彼は声を張り上げ、ベルに向かって言ってはならない言葉を吐く。

「あぁあああ、そうら、そぉんらばかに構ってるふぃまは……」その呂律がだんだんと回らなくなって、視点が定まらなくなってから焦っても、もう遅いのだ。

「馬鹿がやるですって……？　だったらあなたも馬鹿だ。甘味ってのはヘロインよりも中毒性があるらしいですよ、あなたの体型を見ているとよくわかる」

ベルは冷めた目でそう吐き捨てると、ぱっと踵を返して看守室に駆け込んだ。「医者を呼んでッ！　ポルポさんが、ポルポさんがッ！」泡を食って飛び込んできたベルの姿に、室内に動揺が走る。数名いた看守たちはみな一斉に立ち上がって武器へ手をかけたが、ベルはそれどころではないと縋りついた。

「どうしました、おいッ、誰か様子を！」

「は、話していたら突然苦しみだして！　わからないわッ、とにかく早く、医者をッ！」

もちろんこうして一芝居うってみたところで、ベルが全く怪しまれないわけではない。だが、看守が駆け付ける頃合いにはポルポは本当に苦しみ、その生命の機能を止め

てしまっているだろう。
不摂生が過ぎた身体では、十二分にありえる脳の血栓。まさか血管を切り開いてそこに詰まっているものが〝砂糖である〟と調べられるはずもない。そもそもあの巨体ではレントゲンやＭＲＩに入ることができるかどうかも怪しかったが……。

固く閉ざされた鉄戸が開かれ、刑務所の医官がなだれ込む。倒れた時にワイングラスでも割ったのか、ポルポの指先には鋭く切ったような跡があった。
「だめだ！　動かせないッ！」
心臓マッサージをしようにもうつぶせになった彼の巨体は山のようで、肉厚な脂肪は外部からのいかな刺激も吸収する。
ベルは周りの人間が騒いでいる中、ただ無感動にすべてを見守っていた。そんな彼女の姿はあまりに突然〝父親〟を失ったために、呆然としてしまっているように見えたことだろう。
ベルはポルポによくしてもらっていた。ポルポ自身が冗談めかして〝父親（パードレ）〟と言って見せるくらいに。でも、昔からベルにとっての〝父親（パードレ）〟など、ころころと代わってしまうもの。

「……さよなら（アリヴェデルチ）」

恩知らずの悪い娘と言われようが、ベルにはどうしても叶えたい夢ができてしまったのだ。

調べた結果〝白〟でも〝黒〟でもなかった少年の、黄金色の夢。それに賭けることにしたベルは〝悪〟になる。〝悪〟を倒すための、〝より強い悪〟に――。

「地獄でまた会いましょう」

再会を思わせる別れの言葉を囁いて、ベルはゆっくりと目を閉じた。

冥福は、祈らない。

ＥＮＤ

番外編：止まらぬフラテッロ

イタリアの朝は、一杯のエスプレッソで始まる。それもたっぷりの砂糖を入れ、ビスケットやコルネットと共に頂くのがイタリアの伝統的な朝食だ。ビスケットにジャムやチョコレートを塗ることはあっても、肉や卵などの塩気のある料理は邪道。

ひたすら血糖値をあげることに特化したとしか思えないそのメニューは、イタリアーノである以上プロシュートにとっても定番だった。甘い物は特に好きではなかったが、不思議なもので朝はこれでないと始まらない。こういうものを習慣というのだろう。

昨夜は仕事が終わるのが遅く、その流れで朝はゆっくりと過ごすことにした。しかし朝食を済ませ、煙草をふかし、全ての身支度を済ましてもまだ、昼時までは二時間以上も余裕がある。暗殺チームに出勤時間など特に決まっていないが、これ以上は〝ゆっくり〟ではなく〝ダラダラ〟だ。どのみち昨日の仕事の報告書を出しに行かなくてはならないのだから、やるべきことはさっさと済ませるに限る。

そう思い、アジトに向かったプロシュートだったのだが、生憎そこには誰の姿もなかった。

「……他の奴らも仕事だったのか？」

〈パッショーネ〉の暗殺チームは、現在七名で構成されている。担当の地区というものは存在せず、ボスからの指令と報酬のみで働く彼らの仕事は、言ってしまえば酷く不定期なものだ。それでも一応チームとしての意識が高いのか、単に行くところがないだけなのか、アジトに来れば数名は屯っているのが常だった。

プロシュートは仕方なく横長のソファにどっかりと腰を下ろし、手近にあったペーパーバックに手を伸ばす。ファッション誌なんかを読む洒落者がうちにもいたのか、と驚いたのは一瞬のことで、すぐにこれはメローネの忘れ物だな、とローテーブルの上に放り投げた。女向けの内容もさることながら、中のモデルに〝ディ・モールトベネ！〟、〝いい母親になりそうだッ〟とのコメントがわざわざ書き込まれていたからである。

だが、すっかり気分の悪くなってしまったプロシュートは、そこでふと、このペーパーバックをメローネが持ってきた経緯を思い出す。

二日前、あと少しのところで取り逃がしたボスの〝娘〟――トリッシュという名前と、十五歳という年齢しかわからないその少女――を拉致した後で、彼女が退屈しないようにとメローネが先走って気を利かせたのだ。まぁ結局のところ〝娘（トリッシュ）〟が保護さ

れているという屋敷に着いた頃にはもぬけの殻であり、すっかりボスに一杯食わされた形になったのだが、もしかするとまた誰かが〝娘〟の行方を掴んだのかもしれない。それならばこの妙に閑散としたアジトにも納得がいく。

もちろん、裏切りのカムフラージュのため、昨夜はきちんと暗殺の仕事に出かけたプロシュートとペッシにも一言くらい言ってから行くべきだとは思うが。

――まずはペッシの野郎だな……。あいつ、一体いつまで寝てやがんだ

既に苛立ち始めていたプロシュートは、自分と同じように置いて行かれたかもしれない弟分に意識を向ける。昨日一緒に仕事をしていたのだし、おそらくペッシも何も知らされていないだろう。ここでプロシュートまで何も言わずに出てしまったら、アジトで一人、途方に暮れるペッシの姿が容易に想像できる。まったくもって世話の焼ける話だ。

だが、電話の一本でも入れて怒鳴りつけてやるか、と立ち上がったところで、不意に「プロシュート、」と背後から自分を呼ぶ声が聞こえた。もちろんペッシではない。

暗殺者としてはあるまじき不覚だと今度は自分に腹を立てつつ、振り返って相手を見たプロシュートは小さく息を吐いた。

「……リゾット、いたのかよ」

暗殺チームのリーダーであるリゾットは、すっかり感情を排した面持ちで、静かにリ

ビングの入り口にたたずんでいた。「あぁ」彼はプロシュートのひそやかな動揺と安堵には一切関心を示さず、淡々と口を開く。その黒目がちの特徴的な瞳は、瞬きを知ることがないようだった。

「それより聞いたか？」

「聞いてねェ。〝娘（トリッシュ）〟が見つかったのか？」

リゾットがアジトにいるということは、まだそこまで事を急ぐ状況ではないのだろう。そもそも小娘一人攫うのに、暗殺チームが全員で出張る必要性は感じられない。チームを組んでいるだけあってそれぞれ得意不得意の分野が異なるのだし、〝待つ〟というのも暗殺者にとって大事な心構えである。そして短気なメンバーが多い中、リゾットはリーダーに相応しい落ち着きのある男だった。口数は少ないものの機を見る確かさには舌を巻くものがあるし、声を荒げて激昂したり取り乱したりするところを見たことがない。

そのいつも冷静な男が、今日ばかりは珍しく早い口調で言った。

「いや、その話ではない。ポルポのことだ」

「あぁ？　ポルポォ？　あのデブがどうかしたかよ？」

「死んだそうだ」

「……は？」

――ネアポリス刑務所で

本日、午前九時二十五分　ポルポが死亡。

死因は脳梗塞による心肺停止。

アジトにある彼の部屋のＰＣには、そんな無機質な文字が浮かび上がっていた。時刻はつい一時間ほど前の話。

「オイオイオイ、ペッシェ・ドゥ・アプリーレはとっくに過ぎてるぜ……？」

ポルポの体型を知るプロシュートは、死因を見ていかにもありそうだ、と思った。しかしありそうだからこそ逆に信じられない。暗殺を警戒し、身を守るためにわざわざ刑務所なんかに引きこもっていた男が――病死。あまりにも呆気なく、馬鹿馬鹿しい話であった。いっそポルポが幹部などではなかったら、こいつは傑作だと笑っていたかもしれない。

「ポルポが死んだら、もうスタンド使いは生まれねェ……おまけに空いた幹部の座に収まりたい奴がぞろぞろ出てくるぜ」

「荒れるだろうな」

「〝娘（トリッシュ）〟の護衛はどうなる？　てっきりスタンド絡みの案件はコイツのところに回るとばかり思っていたが……」

さすがに刑務所から出られないポルポ自身が護衛するとは思ってはいなかったが、確

実に手掛かりになるとは考えていた。だがこんな形の突然死では、ポルポが誰かに任務を回す余裕があったかどうかも怪しい。今や宙ぶらりんとなったはずの任務の行先は、少なくとも幹部クラスでなければ務まらないだろう。一体誰が……。

　プロシュートがそうやって考え込んだところで、思考を遮るように「葬儀は、」と言葉が続けられる。リゾットがＰＣを操作すると、二件目のメッセージが画面に表示された。

「昼からだそうだ。もうスーツを着込んでいるとは流石だな、プロシュート」

「……あんたのジョークはジョークかどうかわかりにくいぜ。情報収集ってことでいいんだな？」

「あぁ」

「他の奴らは？」

「連絡が取れない者もいるが……大半は葬式なんて面倒だから嫌だとアジトを出て行った」

「はァァ～？　あいつらッ……」

　それで誰もいなかったのか。確かに畏まった場所は苦手、というかお断りされそうな奴らばかりだが、大の大人が揃いも揃ってガキみたいな理由でフケるというのはいかがなものか。

プロシュートが怒りのために眉間に皺を寄せると、それを拒絶と取ったのか、リゾットがやや申し訳なさそうに声を潜める。
「……お前も嫌か？　一応、チームとしてオレが出れば十分だとは思うが」
「いや、そもそもこういうモンはマナーだからな。ペッシも叩き起こして連れて行くぜ」
「そうか。助かる」
「あぁ」
頷いたプロシュートは、まずはペッシを起こすところからだと勢いよくリゾットの私室を出て、そこではて、と首をひねった。
助かる……？　助かるとはどういう意味だろうか。確かにポルポの葬式に進んで出たがる者はいないだろうが、リゾットは任務に追加メンバーを入れる時でも〝助かる〟なんて言い方はしない。あんな何も感じていないような顔をして、実は余程困っていたのだろうか。イタリアの葬式なんて長くても一時間で、大して苦も無く終わるというのに……。
「ハッ、まさか気が進まないのは情報収集のほうだったりしてな……」
参列者に声をかけ、故人を偲ぶところから巧みな誘導でめぼしい情報を聞きだすリゾットの姿――。
確かにそれはプロシュートがどう頑張ってひねり出そうとしても、まったく想像する

ことのできない光景だった。

▼△

人口の九割近くがカトリックを信仰するここイタリアでは、葬式は普通、教会にて執り行われる。生前のポルポがどの程度の信者だったのかは知らないが、システィーナ礼拝堂の壁画を見に行きたがっていたという話があるくらいだから、あんなどうしようもない悪党でも神なんてものの存在は信じていたらしい。

しかし、そんな神の信徒たるポルポの葬式は、ネアポリス刑務所の彼の牢獄にて執り行われる。彼に平穏と悦楽を与えた牢獄はそのまま贅を凝らした棺となり、おあつらえ向きに開いた受け渡し口からは次々と献花が手向けられた。底冷えのする廊下も今日ばかりはキャンドルの灯りに満ち、ＣＤでも流しているのか、荘厳なパイプオルガンの音色が延々と流れている。

こんな妙な葬式は初めてだ。

式に訪れた誰もがそう思っただろうし、実際プロシュートは苦り切っていた。せっかくペッシにマナーを教え込むいい機会なのに、これでは駄目だ。なんの練習にもならない。まだまだスーツに着られている状態の弟分は、先ほどから落ち着きなく視線を彷徨

わせていた。
「か、幹部の葬式っていうからもっと派手だと思ってたけど、案外そうでもないんだね」
「いいかペッシ、これは特例だ。普通はこんなとこで葬式なんてやるもんじゃあねぇ。これが普通だとは思うなよ」
　そもそもの話、刑務所では牢内に人を収容することはあっても、その外に多くの人間がつめかけることを想定されていない。必然、献花は数名ずつの流れ作業と化し、ほぼ花で埋め尽くされたポルポの遺体に冥福を祈った参列者はそのまま刑務所の外へ出ていくしかなかった。もちろん足を止める者もいないわけではないが、そのせいでポルポの眠る棺の前は混雑した日の水族館（アクアリオ）を彷彿とさせる有様である。
「どうする、リゾット？　とりあえず、喪主の女はずっとあそこに突っ立ってるようだが……喪主をやるからにはそれなりにポルポと関係があるんだろ」
「あぁ、おそらく彼女はポルポの〝娘〟だ」
「えッ！　ポルポって〝娘〟がいたんですかいッ!?　ぜ、全然似てねぇ……ッ」
　ペッシが素っ頓狂な声をあげるものだから、つられて女を二度見してしまったが、どう考えても血縁の娘とは思えない。ああして表立って出てくるような女が幹部の血縁ならもっと有名だったろうし、せいぜいポルポの〝お気に入り〟を言い換えただけの言葉だろう。確かにポルポはなかなか趣味が良かったらしく、地味な喪服を着ていてもな

お、凛とした女の佇まいは目を惹くものがあった。
「いや、そういう意味ではなく、彼女はポルポの――」
「アァ～いいよなァ～ッ!!」
　だが、リゾットがペッシの誤解を解くよりも先に、狭い会場の中に男の嘲るような声が響き渡った。見れば数人の男達が、ポルポの〝娘〟を囲うようにして立ちはだかる。彼らはみな一様にスーツを着用していたが、プロシュートからすればそのどれもが無粋で見苦しく思われた。
「よォ～、ベル。これでようやくてめぇの人生の始まりって感じだなァ？　ああ？」
「長いことお勤めご苦労さん。いやぁ、昔はただの小綺麗なガキだったが、仕込めばいい女になるもんだなァ？　おっかない親父の目もねぇことだし、ぜひお相手願いてぇところだが……案外お前ももう、ポルポサイズじゃねぇとイケねぇ身体になっちまってたりしてな？」
　男の揶揄にガハハッ、と品性の欠片もない笑い声が続き、それだけでなく周囲も嘲笑にざわめく。嫌な空気だ。視界の端でペッシがはらはらとした表情を隠しもしない。
　だがベルと呼ばれた当の女は、怒りや羞恥に頬を染めることもなく、ただ黙って男達を見つめていた。トークハットのレース越しにうかがえる表情は人形のように色味を欠いていて、そのくせ瞳だけは気のきつそうな光を宿している。「……ケッ、可愛げの

ねぇ女だぜッ」思わず、嘲笑した男のほうが気圧されてしまうのも理解できるくらいに。
「だ、だがよォ～～そんな女でも親父（パパドレ）にとっては可愛い可愛い存在なワケだ。何しろ、4億もの金をこっそり貯めておいてやるんだからなァ？」
「なぁ、おめー、知ってんだろ？　ポルポの金がどこにあるか。これから先、何の後ろ盾もナシにやっていけるとは思ってねぇよなァ？　あぁ？　なんならおめーごと貰ってやっても構わねぇぜ？」
「……」
「オイッ、てめぇ無視してんじゃあねぇぞッ！　こっちが下手に出てりゃあ調子乗りやがってッ！」
　沸点の低い男たちはベルの態度に我慢できなくなったのか、とうとう嘲りを怒りに変えてがなり立てた。耳障りな声が狭い廊下に反響し、不快以外の何物でもない。
　男の一人が彼女の胸倉をつかんだ時、「チッ」一気に距離を詰めたプロシュートは、強烈な蹴りを男のわき腹に叩きこんでいた。
「つぐはッ……！」
「な、なんだ、てめぇッ！」
　サッカーボールのように容易くぶっ飛んだ男は、廊下の壁に強かに身を打ち付け、崩れ落ちる。突然現れたプロシュートに対して誰何する男たちの声が上がったが、それは

ほとんど悲鳴と変わりなかった。
「おめーらよォ～葬式ぐらい大人しくしてろって、てめぇのマンマに教わんなかったのか？　ああん？」
「ヒッ！」
　その証拠に、プロシュートが凄めば男たちは尻尾を巻いて逃げ出した。後ろで聞こえる〝流石兄貴だッ！〟というペッシの賞賛を受け、悠々とベルの方へ向き直る。
　彼女は最初驚いたように目を瞠っていたが、すぐに気を取り直して礼を言った。
「ありがとう。あの手の男って、時と場所を弁えないから本当に迷惑で……」
「そうだな。まずは、
　Le porgo sentite condogliamze（お悔や申し上げます）」
「ええ、本当に……お気遣いありがとう」
　ベルはそこで少しだけ微笑んだ。そうやって笑うと、まだあどけなさが残っているのがよくわかる。
　彼女はちらり、とポルポの棺の方へと視線をやると、それから恥じ入ったように目を伏せた。
「でも確かにこんな葬式じゃあ、参列者に〝まとも〟を期待するのも図々しいかもしれないわね」

「……普通じゃねぇのは認めるが、それもこれもポルポの身体のせいだろう？　あんたが引け目を感じることはねぇよ」
「まぁそうなんだけど、正直土葬にするか火葬にするかも問題で……外へ運ぶにもきっと壁を壊さなきゃあならないんじゃあないかしら」
「だろうな」
　むしろ、収監したときは一体どのようにしたのだろう。巷に流れる噂としては、ポルポが昔はここまで太っていなかった説と、ポルポの周りに刑務所を建設した説の二通りがある。こうして堂々とマフィアが出入りする葬式まで行えてしまうのだから、金さえ積めば壁を壊すことくらい可能だろうと思われた。もっとも、ホルマジオのような能力者がいれば事は簡単に解決する話であるのだが、今この場でそんなことを言うわけにもいかない。
　そしてそんなことよりも、プロシュートはこの女から情報を聞き出さねばならなかった。無粋な男たちのおかげで得た、思わぬきっかけを利用しない手はない。
「あんたも色々と後のことが大変だな。急なことだから、ポルポの仕事のほうでも不都合があるだろう」
「あら、私がただの〝愛人〟じゃあなかったって言ってくれるの？」
「男女の仲にあったかどうかなんて、面を見りゃあわかる。あんたのそれは、〝男〟を亡

くした〝女〟の顔じゃあねぇな」
「だったらそうね、〝父親〟を亡くした〝娘〟かしら」
「いや……それも違うな。オレにはあんたが〝上司〟を失った〝部下〟に見える」
感じたままにそう言うと、ベルは思わずといったようにぷっ、と吹きだした。「そのまんまじゃない」確かにその通りだ。我ながら何の捻りもない表現には苦笑せざるを得ないが、同時に確信もする。この女は確かにポルポの〝お気に入り〟ではあっただろうが、評価されていたのは容姿ではなくその能力だ。おそらく腹心と言ってもいい位置にいただろう。ポルポが仕事面で目をかけているのはブチャラティだというのがもっぱらの噂だったが、なかなかどうしてこの女も侮れない。
「ポルポには多くの部下がいたわ。なんてったって幹部だもの。……もしかしてあなたも次の幹部に立候補したい人？」
「生憎、幹部なんてモンには興味がねぇな。手のかかる部下はこれ以上要らねぇ」
「そう」
「ただ〝組織〟の人間として誰が次の幹部になるかは興味がある。ブチャラティって奴はどうした？　まさかあんたが一人で葬式を取り仕切ってるわけじゃあねぇだろ？」
プロシュートはブチャラティの顔を知っているわけではなかったが、先ほどから喪主として挨拶を受けているのはベルばかりだった。そうでなくてもブチャラティがこの

場にいれば、遺産目当ての男たちが真っ先に絡みに行っているだろう。
　そしてどうやらこの質問もさんざん聞かれた後だったらしく、ブチャラティの名を出すと、ベルはまたかという顔をした。けれども先ほど彼女を助けたことが幸いしたのか、ため息を零しただけで拒絶する雰囲気は感じられなかった。
「さっきの見てたでしょう。彼がここに来れば、あるかどうかもわからないポルポの遺産のことで煩わされるだけだわ。皆、なんだかんだ私に絡んでも、本命はブチャラティだと思ってるのよ。ただの〝愛人〟に金を残すほどポルポは耄碌しちゃいないってね」
「だからってこの状況をあんた一人に押し付けるのか？　実際にあんただって絡まれて危険な目に遭ってるのに？　……なんだ、ブチャラティってのは男の風上にも置けねぇ野郎だな」
「それは違うッ」
　思ったよりも強い否定が返ってきて、プロシュートは片眉を上げた。身長差のせいで下から見上げる形になるにも関わらず、ベルの態度には一歩も退いたところがない。それは今この場所にいることこそが彼女の戦いであるとはっきり示していた。彼女の顔には自分が矢面に立たされるとわかっていても、ブチャラティの為に些事は全て引き受ける、という覚悟が滲んでいる。
「彼には彼のやるべきことがある、それだけよ」

「……そうか。あんたにそこまで言わせるとは大した男なんだろうな。ブチャラティか……覚えておくぜ」

長話をして悪かった。

そう言ってプロシュートはリゾット達のところへ戻る。収穫は？　と問われれば難しいところだが、プロシュートの勘は確かに手ごたえを感じていた。

まるで足止めをするかのように、急ごしらえで行われた葬式。余程キレた奴でなければ、まずは様子見で式に来るのが普通だろう。そして他にやるべきことがあるとして、不在のブチャラティ。もしかするとそれは単にポルポの遺産を回収しに行くためだけのもので、〝娘（トリッシュ）〟の件とは無関係なのかもしれない。

しかし向かい合ったベルの顔つきは、確かな決意と覚悟を抱いている者のそれだった。そういう奴が〝組織〟の下で燻るわけもないし、そのベルに推されているブチャラティという男の方も同じだろう。ブチャラティは遺産を手に入れ、その金で何をする？

まさかこの期に及んで遊んで暮らそうなんて考えの男であるはずがない。

ブチャラティは金を組織に上納し、幹部になる。ベルもそうだろうが、ポルポの〝お気に入り〟がスタンド使いでないわけがない。

――新しい、誰にも知られていない幹部のスタンド使い……オイオイ、〝娘（トリッシュ）〟の護衛にはピッタリじゃあねぇか

「あ、兄貴、どうでしたッ？　あの女、ポルポの残した仕事についてなんか言ってましたッ!?」
「バッカ、声がでけぇんだよッ……オイ、リゾット。ブチャラティを探すぞ、あいつがおそらく次の幹部だ」
　ペッシの駆け寄らんばかりの勢いを片手で制したプロシュートは、目線だけで首尾を聞いてきたリゾットに向かってざっくりと結論だけ述べる。彼はそれだけで話が読めたらしく、なるほど、と小さく漏らした。
「新しい幹部か。ブチャラティはチームを組んでいるらしいし、スタンド使いが揃っているなら適任だろうな」
「あぁ、そういうことだ。だが、せっかくポルポが病死して幹部になれたってのに、奴も災難だな」
　もしも〝娘（トリッシュ）〟が見つかっていなかったら。
　ブチャラティにとってポルポの突然死は、ただ幹部になるための切符だったろう。〝組織〟では金と権力を振るうロクでもない幹部ばかりが目立つが、ああして慕ってくれる人間がいる男なら、幹部になってもそれなりに見込みはあったかもしれない。
　そう考えると、なんだかブチャラティという男に会えるのが楽しみになってきていた。奴が護衛任務に就いたのなら殺し合いは免れないし、プロシュートは自分の目的の

邪魔になる者は誰であろうと容赦しないが、それでもきっと、ブチャラティは自分が戦うに相応しい相手であるような気がする。

プロシュートがそんな風にまだ見ぬ敵へと思いを馳せつつ刑務所の門をくぐると「その病死のことなんだが、」ゆっくりと後ろに続いたリゾットがぽつりと呟いた。

「……そもそもあれは本当に病死だったんだろうか」

「あぁ？　どーゆ意味だよ、そりゃ。検死の結果、脳の血管が詰まってたんだろ？」

ポルポの死因は脳梗塞。不摂生のために動脈が硬化して狭くなっていたこともあるだろうが、結局は血液が血管の中で固まってしまい、栓となって酸素が行きわたらず死んだのだ。あの体型なので脳みそをスキャンして見たかどうかまでは知らないけれども、目立った外傷もなく、毒殺の類でないことはきちんと確かめられている。

何を言い出すんだ？　と振り返って見れば、リゾットはただでさえ普段から潜められている声をさらに落とした。

「だが、詰まっているのは血の塊じゃなくて何か別の物だ。メタリカが反応しない」

「……ッ」

「ええッ!!　そ、それって、どういうこと……!?」

プロシュートは今しがた出てきたばかりの刑務所を見上げ、肺に溜まった空気を全て出し切るように息を吐いた。やはり、自分の勘は正しかったのだろう。ボスの娘の件も

含め、一体どこまでが偶然で、どこからが必然だったのかはわからないが、何か運命のようなものが動き出した――そう感じずにはいられない。

「……あの女か？　しかし、そいつはまた……どういう能力だよ」

「わからん。だが、迂闊に近づくのは得策ではないな。ひとまず追うのは〝娘（トリッシュ）〟を保護していそうなブチャラティだ。もしもその過程で彼女が邪魔になるようなことがあれば――」

「ブッ殺す！　そうだね、兄貴！」

「ペッシペッシペッシッ、だからよォ～～ッ、そういう言葉はなァ～～！」

がつん、とペッシの頭に容赦なく拳骨を落としてわからせる。本当にこの弟分はいつまでたっても手がかかって仕方がない。しかしプロシュートだって、まったく見込みがないと思っている相手には自らの鉄拳を振るうこともないのだ。

「オレ達の世界では、こうして行動してから言うモンなんだ。オレはおめーに殴るぞッと脅したか？　違うだろッ!?」

「い、痛いよ、兄貴ィ……でもそれじゃあオレ、なんで怒られたのかもわかんねぇよォ」

「……。まぁいい、じゃあ次おめーがまた間違ったときは、一回だけちゃんと説明してやる。それでいいなッ？」

「う、うん……わかったよ、兄貴ッ！」

今回、暗殺チームに課せられた〝仕事〟は、いつものボスからの下される任務ではない。リーダーのリゾットが、チーム一人一人が自らに課した、命がけの反逆だ。

これまで冷遇されてきた暗殺チームは、莫大な金を生む麻薬ルートを奪取する。そしてあまりにも惨たらしく殺された仲間――ソルベとジェラートの屈辱を晴らす。

たとえこの先何人の仲間が死のうとも、もう一歩たりとも譲れぬ戦いなのだ。

「……ペッシよォ、ここが踏ん張りどころだぜ。おめーも早いとこ成長していいところ見せてくれ」

「ま、任せてッ！　オレ頑張るよッ！」

――ったく、相変わらず返事だけはいい野郎だぜ。

苦笑を浮かべたプロシュートは、その顔を見られぬように大股で先を行く。すぐさま慌てたような声が後ろから追いかけてくるが、それでも歩調を緩めることはない。

「待ってくれよ、兄貴ッ！」

「待たねぇ」

いつかペッシが自分を超えていけるその日までは、そうやって前を歩いてやるのが〝兄貴〟の務めだからだ。